

# 多賀城市内の遺跡 2

— 令和 2 年度ほか発掘調査報告書 —

新田遺跡 山王遺跡 高崎遺跡

志引遺跡 大代遺跡

令和 3 年 3 月

多賀城市教育委員会



## 序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡をはじめ、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な文化財を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成31年度と令和2年度に国庫補助事業として実施した個人住宅建築等に伴う13件の発掘調査の成果を収録したものです。その中で、志引遺跡では、古墳時代の石製模造品を製作した痕跡を確認しました。また、山王遺跡では16世紀頃の区画溝跡を調査し、中世の生活の実態に迫る成果が得られました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

令和3年3月

多賀城市教育委員会  
教育長 麻生川 敦



## 例　　言

- 1 本書は、国庫補助事業による平成31年度に実施した発掘調査3件と、令和2年度に実施した発掘調査10件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数值における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下3桁である。
- 4 掘削中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原:1996)を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は小原駿平が行い、本書の編集は大木丈夫が行った。

I・IV・VII・IX: 大木丈夫 II・III・X・XIV: 小原駿平 V: 斎藤健 VI・XII: 赤澤靖章  
VIII: 佐藤純平 XI: 小原一成 XIII: 大場正善
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	新田遺跡第141次調査	3
III	新田遺跡第144次調査	4
IV	新田遺跡第145～147次調査	5
V	新田遺跡第149次調査	6
VI	新田遺跡第150次調査	15
VII	山王遺跡第219次調査	18
VIII	山王遺跡第220次調査	19
IX	山王遺跡第221次調査	25
X	山王遺跡第224次調査	33
XI	高崎遺跡第125次調査	45
XII	高崎遺跡第126次調査	46
XIII	志引遺跡第7次調査	47
XIV	大代遺跡第6次調査	73

## 調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 麻生川敦
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 伊藤文昭
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
 副主任幹 赤澤靖章 斎藤健  
 研究員 大木丈夫 小原一成 関健吾（～R2.3） 大場正善  
 技師 小原駿平 佐藤純平  
 調査員 桑折肇
- 4 調査従事者 浅井知恵 阿部清次 安藤美喜子 伊藤茂 伊藤幸夫 内田節子 内田正樹  
 遠藤光 大塚芳弘 大根田満 閣澤一清 奥山妙子 加藤勝二 加藤浩 横川良谷  
 叶内正悦 狩野修 工藤正好 佐藤長次 佐藤道子 佐藤由紀子 清水泰昌  
 菅原富次男 菅原正義 鈴木優子 鈴木真由美 閣内久子 潤戸口弘行 武田進  
 竹本裕昭 土佐実 畑山眞次 藤村孝行 古瀬律子 三上嘉昭
- 5 整理従事者 有路尚子 石垣玲子 浦山紀以子 奥田美雪 菊池あかね 佐々木直美  
 佐々木宣子 佐藤ゆかり 高橋明子 千葉貴久江 千葉都美 長瀬真貴子  
 秦千尋 堀川紀子 宮城ひとみ

### 調査一覧

平成31年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第141次	多賀城市新田字後93-3	令和2年3月2日～3月5日	9m <sup>2</sup>	小原 (駿)
2	山王遺跡第219次	多賀城市山王字山王二区53-3	令和2年3月2日	4m <sup>2</sup>	大木
3	山王遺跡第220次	多賀城市南宮字伊勢225外	令和2年3月5日～3月25日	380m <sup>2</sup>	関 佐藤

令和2年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
4	山王遺跡第221次	多賀城市南宮字町81番13	令和2年4月8日～5月12日	62m <sup>2</sup>	大木 大場
5	山王遺跡第224次	多賀城市山王字西町浦83-1	令和2年9月1日～10月11日	180m <sup>2</sup>	小原 (駿)
6	志引遺跡第7次	多賀城市東田中二丁目351-21	令和2年5月13日～6月24日	90m <sup>2</sup>	大木 大場
7	新田遺跡第144次	多賀城市新田字西39-3	令和2年7月21日	70m <sup>2</sup>	小原 (駿)
8	新田遺跡第145～147次	多賀城市新田字北144番4	令和2年9月7日～10月11日	188m <sup>2</sup>	斎藤 大木
9	新田遺跡第149次	多賀城市新田字後25番1	令和2年11月2日～11月26日	56m <sup>2</sup>	斎藤 大木
10	新田遺跡第150次	多賀城市南宮字一里塚101-3、 庚申251-3	令和2年11月4日～11月18日	150m <sup>2</sup>	赤澤 桑折
11	高崎遺跡第125次	多賀城市留ヶ谷一丁目274番2	令和2年9月11日～9月17日	25m <sup>2</sup>	小原 (一)
12	高崎遺跡第126次	多賀城市留ヶ谷一丁目231-34、240-5	令和2年11月20日～11月27日	73m <sup>2</sup>	赤澤 桑折
13	大代遺跡第6次	多賀城市大代六丁目28番1	令和2年10月27日	50m <sup>2</sup>	小原 (駿)

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S A : 柱列跡 S B : 据立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 壁穴建物跡 S K : 土坑  
P : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。
  - (1) 土師器坏

A類 : ロクロ調整を行わないもの  
B類 : ロクロ調整を行ったもの

B I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの  
B II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの  
B III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの  
B IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの  
B V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り(糸切り)によるものをcとして細分する
  - (2) 土師器甕
  - (3) 須恵器坏
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田櫛跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907~934年の間とする考え(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998)と、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷農桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授追官記念地質学論文集』1991)。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。



## I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に延びている。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmである。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

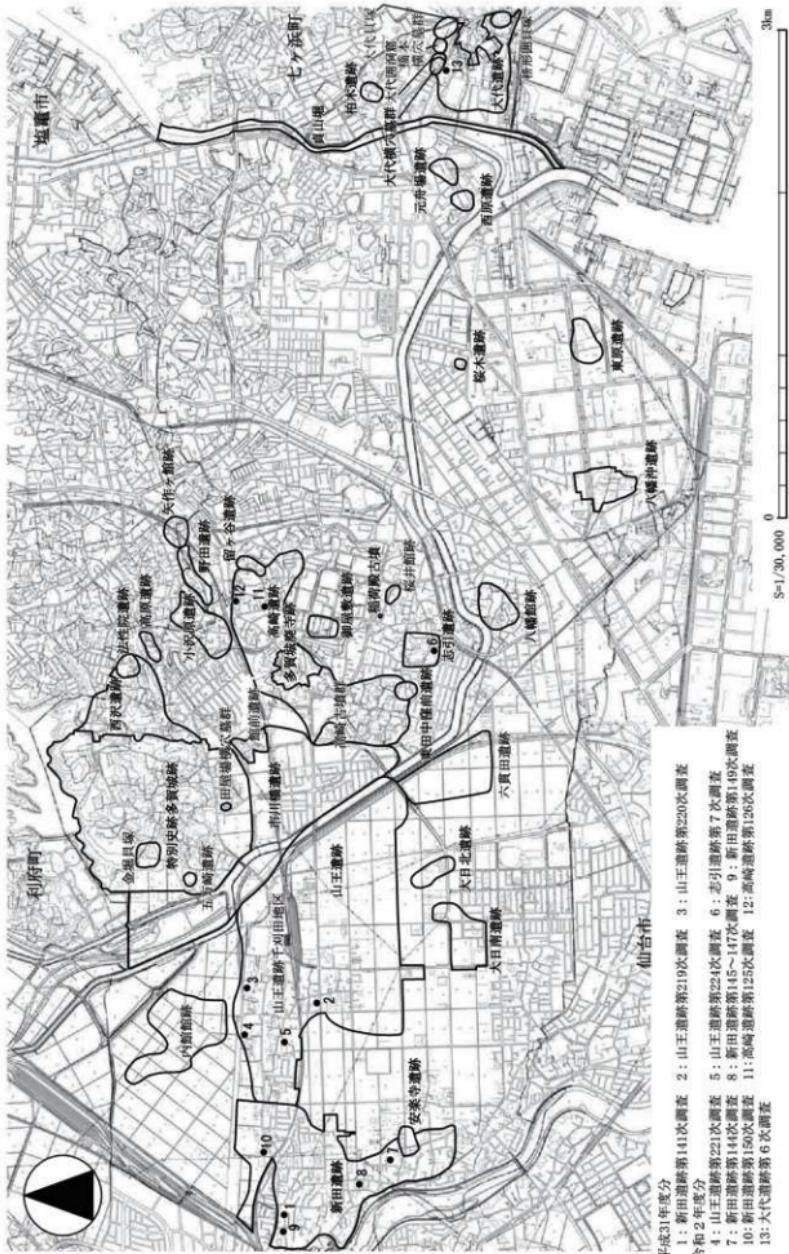
山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmである。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や戸井跡などが多数発見されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmである。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廐寺跡の西側で約60軒の堅穴建物跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で発見され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

志引遺跡は、標高約20mの低丘陵の西端部に立地し、範囲は東西、南北ともに約100mである。古墳時代後期の堅穴建物跡が発見されている。

大代遺跡は、市南東部の砂丘に立地し、東西約60m、南北約40mである。北側の丘陵部に大代貝塚などの縄文時代晩期の遺跡や古墳時代末から古代にかけての大代横穴墓群などの遺跡が存在している。本遺跡では、古代の遺物が散布している。

第1図 調査地点の位置

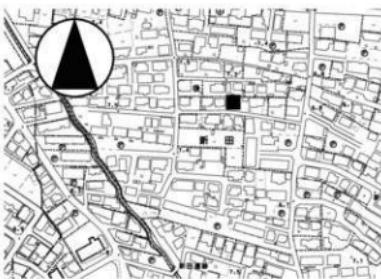


## II 新田遺跡第141次調査

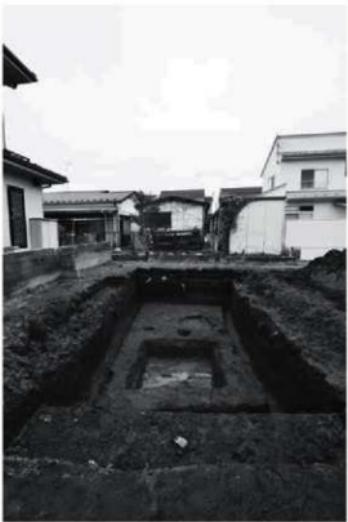
### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和元年12月、事業者から当該事業計画地における埋蔵文化財発掘の届出が提出された。工事計画は合計31本の改良杭を現地表面から7mの深さまで打ち込むものであり、遺跡への影響が懸念された。その後、令和2年2月に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、確認調査を行うこととなった。

今回の調査では、現地表面から2.0mの掘削を行ったものの、旧河川に由来する砂層が厚く堆積するのみであり、遺構・遺物は確認されなかった。



S=1/5000 0 100 200m  
第1図 調査区位置図



調査区全景（南から）



S=1/150 0 3m  
第2図 調査区配置図



深掘りトレンチ

### III 新田遺跡第144次調査

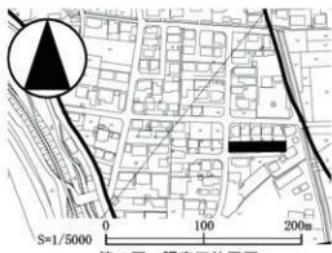
#### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字西における建売住宅5棟の新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年4月、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。

工事は住宅の基礎工事で深さ40cmまで掘削を行うものである。周辺では平成23年度に第85次調査を行い、現地表から2.0mの盛土を確認している。

したがって本件工事による掘削が遺跡に与える影響は軽微と判断されるが、計画面積が広域であることから、確認調査を行うこととなった。

今回の調査では、開発範囲内に6つの調査区を設定し、それぞれ現地表面より1.5mから1.9mほど掘削を行った結果、5区で時期不明の溝跡を発見したものの、遺物等は出土しなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



1区掘削状況



5区掘削状況

## IV 新田遺跡第 145 ~ 147 次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字北地内における 3 件の個人住宅新築に係る確認調査である。令和 2 年 6 月 26 日～7 月 17 日に、各地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅の基礎工事の際、直径 20 cm、長さ 7.2 ~ 8 m の杭を 19 ~ 37 本打つものであった。当該地周辺で、東側近接地で平成 23 年度に第 72 次調査を実施しており、現表土から 1.3 m で遺構が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡の保存を図るために、工法変更などの協議を行ったが、提出された工法以外では、十分な強度を得られないことから、確認調査を実施することになった。

調査は、3 件同時に実施した。9 月 7 日から重機による掘削を開始した。9 月 15 日から発掘作業員による遺構確認を実施した。しかし、遺構と思われる箇所があったが、現代の掘りこみであることが確認できた。遺物も少々見られたが、遺構は確認できなかつたため、9 月 23 日から埋め戻し作業をはじめ、9 月 29 日にすべての機材を撤出し、調査を終了した。



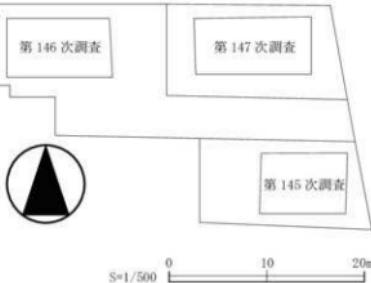
第145次調査完掘状況（西から）



第146次調査完掘状況（西から）



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図



第147次調査完掘状況（東から）

## V 新田遺跡第149次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は新田字後地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。

令和2年8月12日、地権者から当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、地盤改良工事として杭を29か所、現地表から3mの深さまで打ち込むというものである。

当該地周辺では、平成27年度に第103次調査が西方約70mの地点で実施されており、現表土から深さ120cmで奈良時代の堅穴建物跡や平安時代の溝跡を検出していることを踏まえ、地権者と協議をした結果、遺跡への影響が懸念される部分について本発掘調査を実施することになった。

令和2年10月16日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の書類の提出を受け、11月2日より現地調査を開始した。重機により現表土から140cmの深さまで慎重に掘削し、土砂は調査区外の仮置き場へ搬出した。その後、遺構検出作業を進め、11月12日に遺構精査作業を開始した。11月19日には遺構の完掘状況写真を撮影し、11月24日に平面図作成作業を完了した。11月25日に仮設トイレとテントを撤去、機材を撤収し、11月26日に仮置き場から土砂を調査区に戻して調査を終了した。

### 2 調査成果

今回の調査は、調査対象面積135.19m<sup>2</sup>のうち、住宅建設で遺構まで影響を受ける56.27m<sup>2</sup>を調査区として設定して実施した。

#### (1) 層序(第4図)

I 1層：宅地分譲に造成された近年の盛土層。

I 2層：宅地造成以前の旧住宅地の地表層。歯ブラシ等の現代遺物を含む。

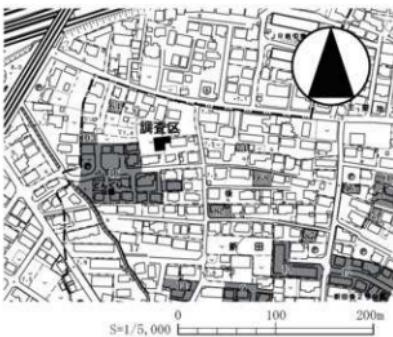
I 3層：污水槽と思われるコンクリート枠の埋土。

I 4層：コンクリート枠を設置する時の掘削層。

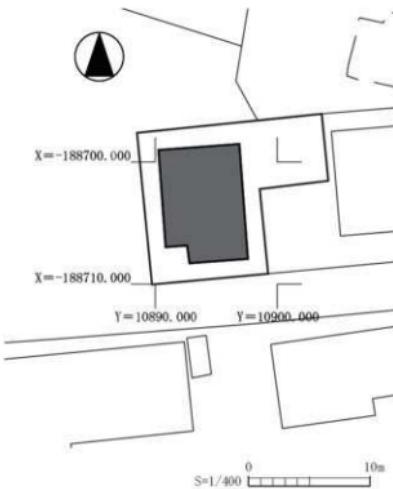
II 1層：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト。非常に固く締まっている。近世以降の地表層と耕作土と思われる。

II 2層：褐色(10YR4/4)砂質シルト。非常に硬くしまっている。炭化物を微量に含む。

II 3層：灰色(5Y4/1)シルト。非常にしまっている。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

炭化物を微量に含む。グライ化している。

- III 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。非常にしまっている。粘性やや有り。炭化粒を少量含む。黄褐色シルトブロックを微量に含む。II 1 層との境界が酸化している。
- IV 層：褐色（10YR4/4）砂質シルト。非常にしまっている。古代の遺構確認面。
- V 層：オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト。非常にしまっている。

## （2）発見遺構と遺物

平面では確認できなかったが、調査区西壁面でIII層上面にあるピットを1基確認した。また、IV層上面で、堅穴建物跡1棟、性格不明遺構1基、溝跡12条、ピット2基を検出した。以下、層序別、遺構別に調査成果を記す。

### 【III層上面確認遺構】

#### P 1 ピット（第4図）

【位置】調査区西壁面北側に位置している。

【重複】平面ではプランを確認できずに断面で確認した。III層を掘り抜いている。重複関係はない。

【方向・規模】検出した範囲では、直径約0.3m、深さ約40cmの規模である。

【遺物】遺物は出土していないが、古代の遺構確認面であるIV層より30cmほど浅いIII層が確認面となるので、中世か近世の遺構と考えられる。

図 No.	遺 構	層位	土 色	土 性	備 考
4図-1	P 1	1層	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	ややしまっている。炭化粒を微量に含む。柱根の抜き取り痕。
4図-2	P 1	2層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ややしまっている。黄白色砂質シルトブロックを少量含む。柱痕。
4図-3	P 1	3層	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	しまっている。黄褐色砂質シルトを斑状に含む。掘り方。

### 【IV層上面確認遺構】

#### S I 2253 堅穴建物跡（第3・4図）

【位置】調査区の北西部に位置し、北側は調査区外に延びている。

【重複】SD 2262、2265溝跡、P 1、3ピットより古い。

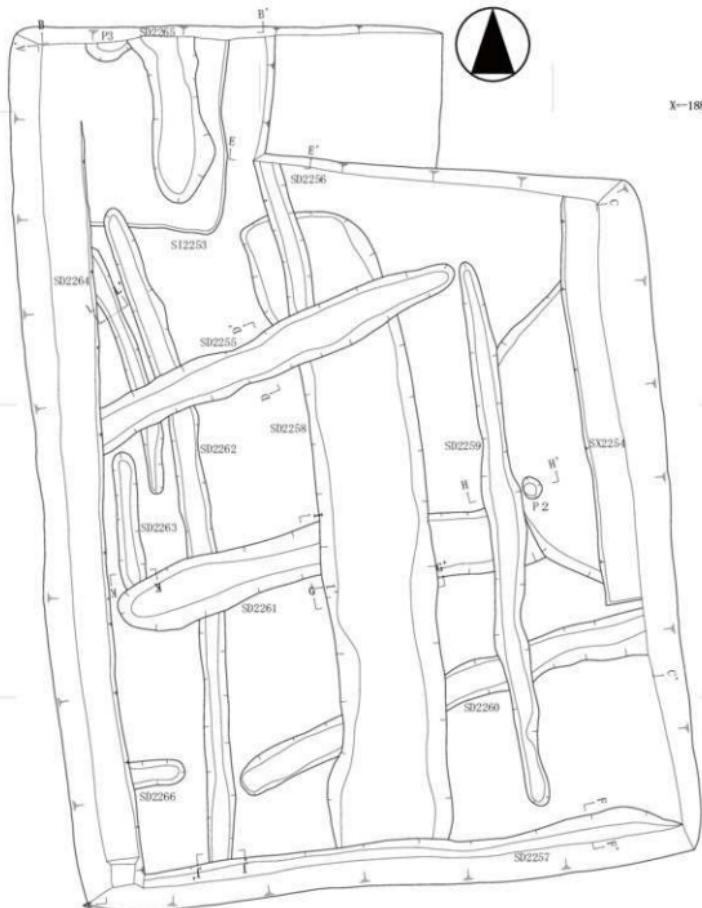
【方向・規模】検出した範囲では、南北約2m、東西約2mの規模で、調査区の北壁、西壁方向の調査区外に伸びていて正確な大きさは不明である。主軸方向はほぼ東西南北に合っている。

【壁・底面】壁はほぼ遺存していない。柱穴等の施設は確認できなかった。

【埋土】2層確認でき、2層は貼り床と考えられ、1層は貼り床が後世に擾乱された層とみられる。

【遺物・年代】1層土から、SD 2265溝跡とP 3ピットに壊された状態で土師器の壺の体部破片が出土している。他にも土師器片が出土した。出土遺物から、遺構の年代は古墳時代後期とみられる。

図 No.	遺 構	層位	土 色	土 性	備 考
4図-4	S I 2253	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	III層土に2層土ブロック状を多く含む。2層が擾乱された層。
4図-5	S I 2253	2層	褐色（10YR4/4）	シルト	しまっている。炭化物を微量に含む。遺物を少量含む。



第3図 遺構配置図

#### S X 2254 性格不明遺構（第3・4図）

【位置】調査区東壁のほぼ中央に位置している。

【重複】S D 2259 溝跡、P 2 ピットより古く、S D 2260、2261 溝跡より新しい。

【方向・規模】長さが約 3.6 m、幅は約 1.2 m、深さ約 30cm である。

【遺物】遺物は出土していないが、2 層から灰白色火山灰が検出されている。

図 No.	遺構	層位	土 色	土性	備 考
4 図-6	S X 2254	1 層	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	砂質シルト	非常にしまっている。炭化粒を微量に含む。
4 図-7	S X 2254	2 層	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	非常にしまっている。炭化粒を微量に含む。灰白色火山灰を斑状に少量含む。
4 図-8	S X 2254	3 層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	非常にしまっている。炭化粒を微量に含む。

#### S D 2255 溝跡（第3・4・5図）

【位置】調査区北側に位置する。

【重複】S D 2256、2258、2262、2264 溝跡より新しい。

【方向・規模】主軸は東西方向だが、西を基準にすると北に約 30 度傾く。長さが約 4.0 m、幅は約 0.5 m、深さは約 20cm である。

【遺物】遺物は出土していない。

#### S D 2256 溝跡（第3・5図）

【位置】調査区北側ほぼ中央に位置する。

【重複】S D 2255 溝跡より古く、S D 2258 溝跡より新しい。

【方向・規模】主軸は南北方向だが、南を基準にすると西に約 18 度傾く。長さが約 1.5 m、幅は約 0.3 m、深さは 13cm である。

【遺物】遺物は出土していない。

#### S D 2257 溝跡（第3・4・5図）

【位置】調査区南壁に東西方向に延び、東西方向とも調査区外に延びている。

【重複】S D 2258、2262 溝跡より新しい。

【方向・規模】主軸は東西方向だが、西を基準にすると北に約 10 度傾いている。長さは約 5.5 m、幅は約 0.3 m ほど確認できたが、調査区外に延びており正確な幅は不明である。深さは 30cm ある。

【遺物】遺物は出土していない。

#### S D 2258 溝跡（第3・5図）

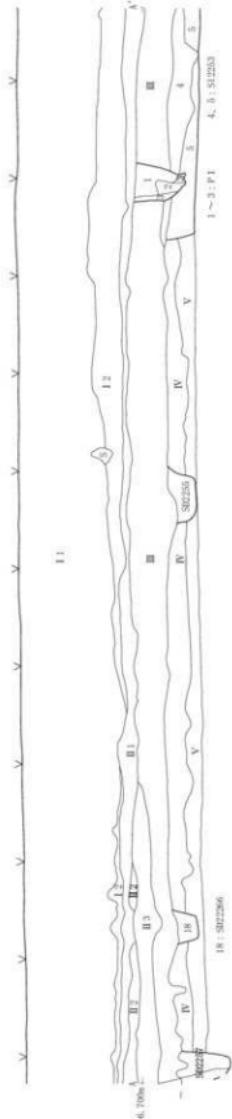
【位置】調査区のほぼ中央部に位置し、南側が調査区外の延びている。

【重複】S D 2255、2256、2257 溝跡より古く、S D 2260、2261 溝跡より新しい。

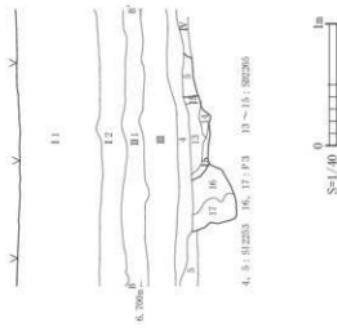
【方向・規模】主軸は南北方向だが、南を基準にすると、約 10 度西に傾いている。長さが約 6.5 m、幅約 1 m、深さ約 13cm の規模である。本調査で最も大きな溝である。

【遺物】土師器類の小片が少量出土している。

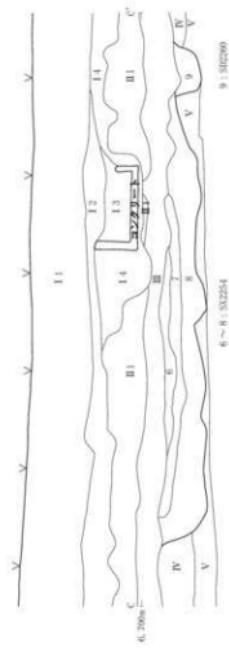
## 西壁断面



## 北壁断面

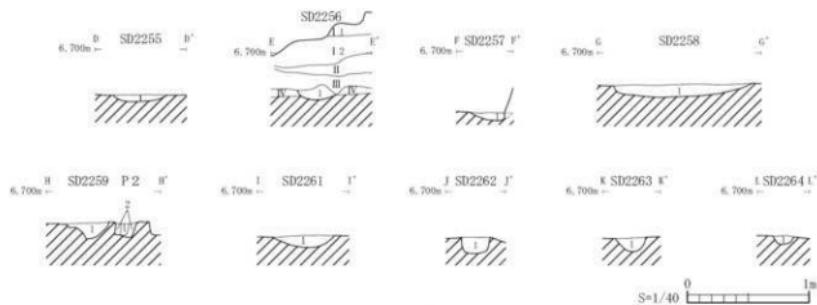


## 東壁断面



9 : S02260

第4図 調査区断面図



第5図 遺構断面図

### SD 2259 溝跡（第3・5図）

【位置】調査区の東側に位置する。

【重複】SD 2260、2261 溝跡、SX 2254 性格不明遺構より新しい。

【方向・規模】主軸は南北方向だが、南を基準にすると西に約10度傾いている。長さが約5.5m、幅は約0.4m、深さ約10cmの規模である。

【遺物】遺物は出土していない。

図No.	遺構	層位	土色	土性	備考
5図	SD 2255	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	細砂	しまっている。炭化粒を微量含む。
5図	SD 2256	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	炭化粒を多く含む。
5図	SD 2257	1層	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	しまっている。炭化粒を微量含む。
5図	SD 2258	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	しまっている。炭化粒、土師器細片を微量含む。
5図	SD 2259	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	粘性やや有り。しまっている。炭化粒を少量含む。

### SD 2260 溝跡（第3・4図）

【位置】調査区南側に東西方向に延びている。

【重複】SD 2258、2259 溝跡、SX 2254 性格不明遺構より古い。

【方向・規模】主軸は東西方向だが、西を基準にすると若干湾曲しながら北に約27度傾く。長さが約4.5m、幅は約0.4m、深さは約20cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

図No.	遺構	層位	土色	土性	備考
4図-9	SD 2260	1層	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	非常にしまっている。炭化粒を微量に含む。
4図-18	SD 2266	1層	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまっている。地山土に上層土を斑状に含む。

### SD 2261 溝跡（第3・5図）

【位置】調査区中央部に東西方向に延びている。

【重複】SD 2262、2263 溝跡より新しく、SX 2254 性格不明遺構、SD 2258、2259 溝跡より古い。

【方向・規模】主軸は東西方向だが、西を基準にすると若干湾曲しながら北に約15度傾く。長さが約4.3m、幅は約0.6m、深さは10cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

### SD 2262 溝跡（第3・5図）

【位置】調査区西側に位置する。

【重複】SD 2255、2261溝跡より古く、SI 2253堅穴建物跡より新しい。

【方向・規模】主軸は南北方向だが、途中で少し屈曲している。南を基準にすると、はじめは西に約8度、中央ほどで20度まで傾く。長さが約6.7m、幅は約0.3m、深さは13cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

### SD 2263 溝跡（第3・5図）

【位置】調査区西側に位置する。

【重複】SD 2261溝跡より古い。

【方向・規模】主軸は南北方向だが、南を基準にすると西に約10度傾く。長さが約1.5m、幅は約0.3m、深さは12cmである。

【遺物】土師器小片をわずかに含む。

### SD 2264 溝跡（第3・5図）

【位置】調査区西側に位置する。

【重複】SD 2255溝跡より古い。

【方向・規模】主軸は南北方向だが、南を基準にすると西に約20度傾く。少し湾曲している。長さが約2.5m、幅は約0.2m、深さは7cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

図No.	遺構	層位	土色	土性	備考
5図	SD 2261	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	しまっている。砂と炭化粒を微量含む。
5図	SD 2262	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	しまっている。炭化粒を少量含む。
5図	SD 2263	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	しまっている。炭化粒を少量含む。土器片を含む。
5図	SD 2264	1層	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	非常にしまっている。炭化粒を微量含む。

### SD 2265 溝跡（第3・4図）

【位置】調査区北壁に位置する。

【重複】P 3 ピット、SI 2253堅穴建物跡より新しい。

【方向・規模】主軸は南北方向で、ほぼ傾きはない。長さが約1.5m、幅は約1m、深さは約20cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

図No.	遺構	層位	土色	土性	備考
4図-13	SD 2265	1層	褐色 (10YR4/4)	シルト	ややしまっている。炭化粒を少量含む。黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。
4図-14	SD 2265	2層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	粘性有り。炭化粒を多く含む。黄褐色砂質シルトを斑状に含む。
4図-15	SD 2265	3層	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	しまっている。

### P 2 ピット (第3・5図)

【位置】調査区の東側に位置する。

【重複】S X 2254 性格不明遺構より新しい。

【規模】大きさは 0.2 m × 0.25 m ほど。深さは 10cm である。

【遺物】遺物は出土していない。年代は不明。

図 No.	遺構	層位	土色	土性	備考
5図	P 2	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	粘性やや有り。しまっている。柱底。
5図	P 2	2層	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	砂質シルト	しまっている。黄白色シルト小ブロックを少量含む。

### P 3 ピット (第3・5図)

【位置】調査区の北壁面に位置する。

【重複】S I 2253 壓穴建物跡より新しく SD 2265 溝跡より古い。

【規模】大きさは直径 0.5 m ほど。深さは 36cm である。

【遺物】遺物は出土していない。

図 No.	遺構	層位	土色	土性	備考
5図	P 3	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	粘性やや有り。しまっている。柱根の抜き取り痕。
5図	P 3	2層	オリーブ褐色 (2.5Y4/4)	砂質シルト	しまっている。掘り方。

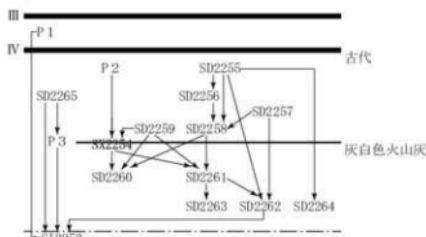
### 3まとめ

本件は新田字後地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。今回の調査では、堅穴建物跡 1 棟、溝跡 12 条、性格不明遺構 1 基を検出した。

III 層では中世から近世とみられる P 1 ピットを断面で確認できた。IV 層からは古墳時代後期の堅穴建物跡と平安時代の溝跡が検出されている。古墳時代後期の S I 2253 壓穴建物跡は、貼り床面を擾乱されており、検出面が平安時代の遺構と同じであることから、平安時代に古墳時代の地表面は削平擾乱されたと思われる。

溝類に関しては、当市の発掘調査で「小溝」と分類されているものがほとんどである。出土遺物がほとんど無くわずかな平安時代の遺物が出土したのみであるが、S X 2254 性格不明遺構の埋土に灰白色火山灰が含まれていることから、これら遺構の年代はおおむね 9 ~ 10 世紀の時期に収まるものと考えられる。溝跡については、方向や堆積土の質などいくつかの時期が近い遺構グループに分類できると思われ、関係性をまとめる第 6 図のようになる。矢印は直接重複関係があることを示す。SD 2262、2263、2264 溝跡は同一グループに属する小溝群であり、S I 2253 壓穴建物跡に次ぐ古い段階と考えられる。次いで、SD 2260、2261 溝跡のグループが古く、S X 2254 性格不明遺構より古い。SD 2258、2259 溝跡は同グループと考えられ、灰白色火山灰降灰時期より新しいとみられる。SD 2255、2256 溝跡も同じ小溝群を形成すると考えられ、それよりも新しいのが SD 2255 溝跡である。

平成 30 年に、当調査区の南約 200 m で実施された新田遺跡第 127 次調査では、古墳時代後期の



第 6 図 遺構新旧関係

堅穴建物跡が検出されており、出土遺物の依存状態が悪く詳細は不詳であるが、当調査区で検出された堅穴建物跡 S I 2253 も近い年代である可能性が高い。

#### 参考文献

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡 2 -平成31年度ほか発掘調査報告書-』多賀城市文化財調査報告書第144集 2020



1 S I 2253 土師器壺出土状況（南西から）



2 S I 2253 完掘状況（西から）



3 調査区全景（北から）

写真図版 1

## VI 新田遺跡第150次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字一里塚・庚申地内における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。

令和2年8月5日、地権者より当該地での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、開発面積46.21m<sup>2</sup>の敷地に幅4.2mの道路と4区画の宅地を造成するもので、当該地の東側で実施した第140次調査では、現地表から約100cm下で遺構を見発している。このことから、遺跡への影響が懸念され確認調査を行うこととなった。

地権者から令和2年10月20日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、令和2年11月4日から発掘調査に着手した。重機で盛土・表土を除去し、IV層上面から遺構の検出作業を行い、溝跡を見発した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は11月13日に終えた。11月18日に機材の撤収を完了し、すべての調査を終了した。

### 2 調査成果

#### (1) 層序

I層：現代の盛土。厚さは約15～60cmある。

II層：暗褐色（10YR3/4）粘土で、現代の耕作土である。

厚さは約50～70cmである。

III層：黒褐色（10YR3/1）土である。旧表土。厚さは約5～20cmである。

IV層：にぶい黄褐色（10YR5/3）土である。酸化鉄を含む。IV層上面（一部）で灰白色火山灰の自然堆積を確認した。上面が古代の遺構確認面である。厚さは約10～20cmである。土師器壺（B類）、須恵器壺、須恵系土器壺、灰釉陶器皿（第5図1）が出土した。

V層：褐灰色（10YR4/1）粘土である。厚さは約10～25cmである。

VI層：にぶい黄橙色（10YR6/4）土である。酸化鉄を含む。

#### (2) 発見した遺構と遺物

##### S D2252溝跡（第3・4図）

【位置】調査区中央部で検出した。

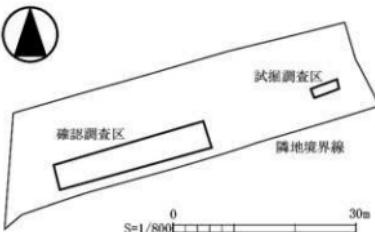
【方向・規模】南北方向である。規模は長さ2.2m以上、上幅94cm、深さ38cmである。

【埋土】2層確認し、1層で灰白色火山灰ブロックを確認した。自然堆積である。

【遺物】出土していない。



第1図 調査区位置図

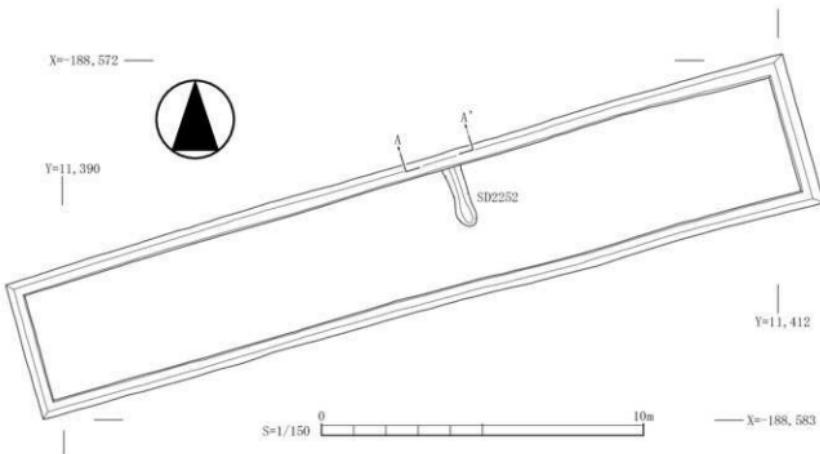


第2図 調査区配置図

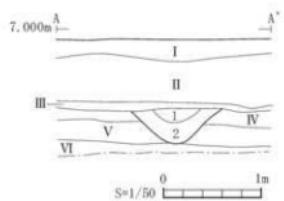
### 3 まとめ

今回の調査では、IV層上面で溝跡1条を検出した。遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦で量は少ない。SD2252溝跡の年代については、埋土に灰白色火山灰が含んでいることから火山灰が降下した10世紀前葉以降と考えられる。

また、計画地東側で遭構確認面であるIV層上面までの深さを調べるため確認するため試掘を行い、地表面から61cmの深さであることを確認した。



第3図 調査区平面図



層位	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	灰白色火山灰ブロックを含む (二次堆積)。
2	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト	V層土ブロックを含む。

第4図 SD2252溝跡断面図

(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
				外面	内面					
1	灰釉陶器皿	-	IV層上面 底部:回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ 施釉	-	(8.8) 5/24	(1.5)	R1	尾張座

第5図 出土遺物



調査区全景（西から）



S D 2252溝跡検出状況（北から）



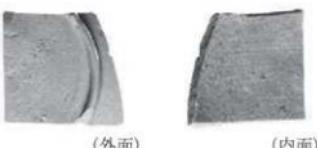
S D 2252溝跡完掘状況（西から）



S D 2252溝跡断面（南から）



試掘調査区東壁断面



(外側) (内側)  
灰釉陶器皿

## VII 山王遺跡第219次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王二区地内における店舗新築に伴う確認調査である。

平成31年4月26日に地権者より当該地での店舗新築と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、駐車場敷地内に看板を設置するもので、工事は2m×2mの範囲を現地表から約5m掘削した後、看板の支柱を設置する工事である。

当該地周辺において第105次調査を実施し、現地表面から1mで遺構を確認しているため、遺跡への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、この工法以外では、十分な地盤強度を得られないため、確認調査を実施することになった。

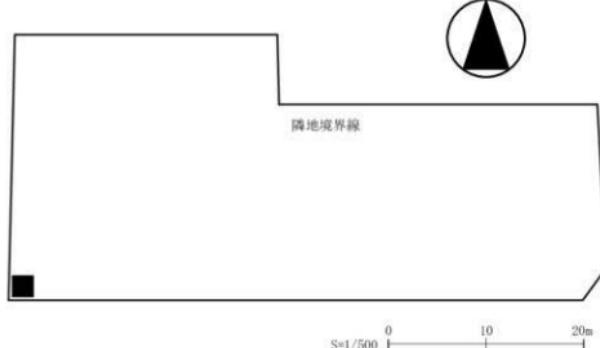
令和2年3月2日に重機による掘削を開始した。表土が約30cmあり、約50cmの暗褐色のシルト層で遺構確認面と考えられる層を検出した。しかし、掘削した範囲には遺構ではなく、遺物もなかったことから、記録、写真撮影などを行い、その日に調査を終了した。



第1図 調査区位置図



完掘状況（南から）



第2図 トレンチ配置図

## VIII 山王遺跡第220次調査

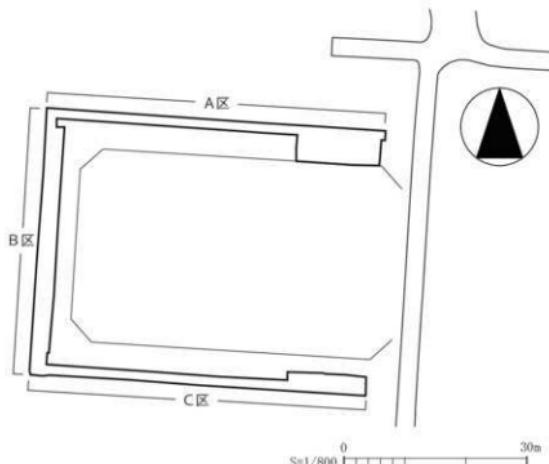
### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮宇伊勢地内における宅地造成工事に伴う確認調査である。令和元年9月10日に、地権者より当該地での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、幅6mの道路を設置して宅地23区画を造成するもので、道路部分においては現地表から最大90cmの盛土をし、給排水管敷設のために幅最大2m、深さ最大約2.2mの掘削を行う内容であった。南側隣接地で平成27年度に実施した山王遺跡第159次調査では、現地表から深さ約60cmで遺構を確認しており、遺跡への影響が懸念された。また、今回の工事対象地区は開発計画面積も広いことから、対象地における遺構の分布状況を把握する必要があり、確認調査の実施に至ったものである。

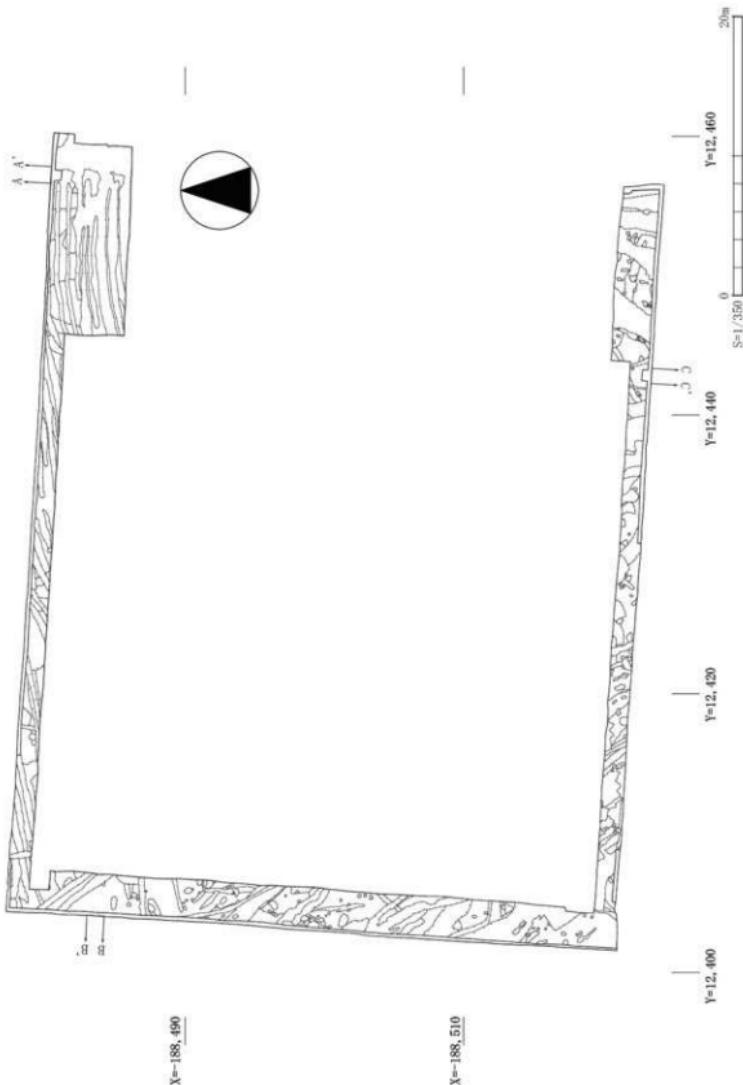
令和2年2月19日に地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、3月5日より現地調査に着手した。まず、調査区を北からA区・B区・C区に分け(第2図)、A区より重機で表土掘削を行った。6日より調査区北側から作業員による遺構の検出作業に着手し、12日から17日にかけて写真撮影・図面作成を行った。その後、埋め戻しを行い25日に調査を終了した。



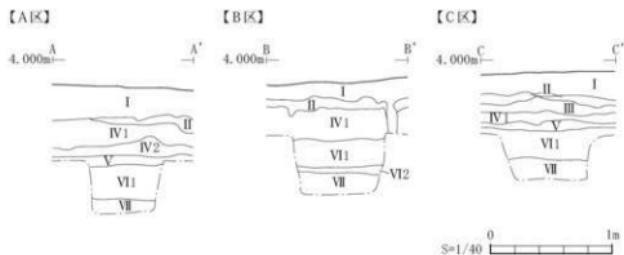
第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 調査区全体図



第4図 調査区A区・B区・C区断面図

## 2 調査成果

### (1) 層序

- I層：黒褐色(10YR3/1)シルトで、現代の水田耕作土である。厚さは調査区全体で20～30cmである。
- II層：灰色(7.5Y6/1)粘土で、調査区全体で確認しており炭化物、鉄分を含む。すべての古代の遺構を覆っている。厚さは8～10cmである。
- III層：灰白色(10YR7/1)砂質土で、C区でのみ見られる。炭化物、鉄分を多く含む。厚さは6～10cmである。
- IV1層：灰白色(7.5Y8/2)シルトで、上面が古代の遺構検出面である。厚さは調査区全体で20cmである。
- IV2層：にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質土で、A区でのみ見られる。厚さは10～20cmである。
- V層：灰白色(5Y7/1)で、A区、C区でのみ見られる。北側では黒色(N1.5/0)粘土が大量に混入している。厚さは10cmである。
- VI1層：灰白色(2.5Y8/2)シルトで、A区ではグライ化し、明青灰色(10BG7/1)となる。厚さは調査区全体で30cmである。
- VI2層：褐灰色(10YR1/1)シルトで、B区でのみ見られる。厚さは均一で4cmである。
- VII層：黒灰色(N3/0)粘土で、調査区全体で確認した。

### (2) 発見した遺構と遺物

調査区北側で東西に並行する小溝群や溝跡が密度濃く分布している様子を確認した。調査区西側と南側では、多くの溝跡やビットなどを検出した(第3図)。遺物は、図示していないが、IV層から古代の土師器、須恵器が出土している。

## 3 まとめ

今回の調査では調査区全体に遺構が過密に分布する様子を確認した。特にA区では南北に並行する小溝群を複数確認した。遺構の掘下げは行っていないものの、IV層からは土師器片、須恵器片が出土したことから古代の遺構と考えられる。また、黒灰色粘土層(VII層)は、周辺地域の調査で確認している古墳時代の水田層に土質が類似している。このことから、本地点においても古墳時代の遺構がある可能性がある。



A区遺構検出状況（東から）



A区南壁土層堆積状況（南から）



B区遺構検出状況（南から）



B区東壁土層堆積状況（東から）



C区遺構検出状況（東から）



C区北壁土層堆積状況（南から）

## IX 山王遺跡第 221 次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における個人住宅建設に伴う本発掘調査である。

令和元年 10 月 24 日に地権者より当該地での個人住宅と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、172.18 m<sup>2</sup> の敷地に約 62 m<sup>2</sup> の個人住宅を建設するもので、住宅の基礎工事において 43 箇所に直径 140 mm の杭工事を、現地表から深さ約 7.0 m まで実施するものである。

当該地周辺において、西側側隣接地で平成 28 年度に第 177 次調査を実施しており、現地表面から 2.3 m で遺構が発見されており、遺跡への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、提出された工法以外では、十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することになった。

令和 2 年 3 月 31 日に、地権者から発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、同年 4 月 8 日から発掘調査に着手した。重機で表土を除去し、VI 層上面で遺構を確認した。その後、遺構を掘削し、平面図、断面図作成、写真撮影を行い、5 月 12 日までに器材の撤収を完了し、現地調査を終了した。

### 2 調査成果

#### (1) 層序

I 層：現代の盛土で約 60 ~ 80 cm ある。

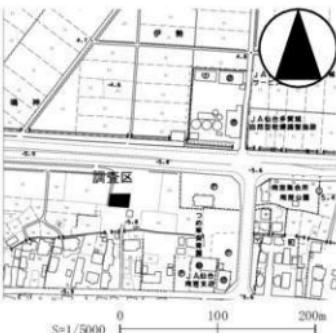
II 層：旧耕作土で黒褐色（10YR3/1）の粘質土であった。厚さは約 10 ~ 30 cm ほどある。

III 層：調査区北側から南側に広がっているが、南端部では確認できなかった。暗褐色（10YR3/3）の粘質土で、約 5 ~ 30 cm ある。

IV 層：調査区全体で確認しており、黒色（10YR2/1）の粘質土で約 30 ~ 40 cm ある。

V 層：調査区南端部で確認している。黒褐色（10YR3/2）粘質土で約 15 cm ある。

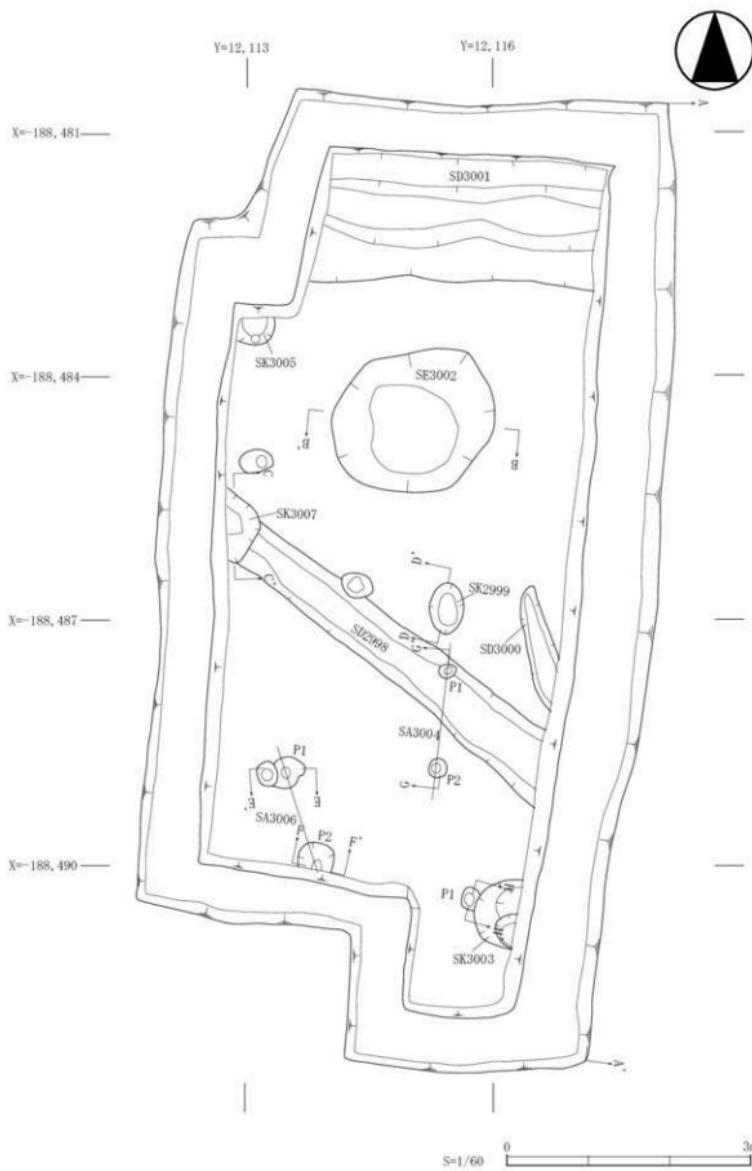
VI 層：古代から近世の遺構確認面である。にぶい黄褐色（10YR5/3）の砂質土で約 30 ~ 35 cm ある。



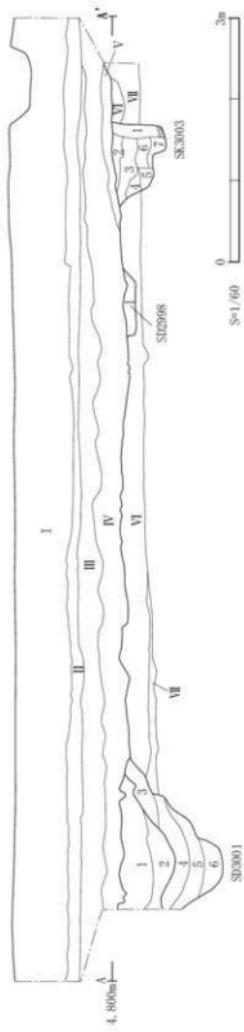
第 1 図 調査区位置図



第 2 図 トレンチ配置図



第3図 遺構平面図



No.	箇場	層位	土色	土性	備考
1	SK0998	1層	黒褐色土 (0)R2/2	粘質土 稍主り シルト	しまり やや強 粘性 中
2	SK0001	1層	黒色 (2, 5)R2/1	粘主り 有 シルト	やや強 粘化物少量
3	SK0001	2層	黒色 (1)R2/1	粘主り やや有 シルト	地 粘化物微量
4	SK0001	3層	黒褐色 (1)R3/1	粘主り 強	やや強 粘化物少 強 少量
5	SK0001	4層	黒色 (1)R2/1	粘主り やや弱	灰黃褐色細砂と互層
6	SK0001	5層	オリーブ黒色 (1)R3/1	砂質 粘主り 弱	黑色粘土と互層
6	SK0001	6層	暗緑灰色 (7, 5)R1/3/1	砂質 粘主り 弱	なじ 暗黑色粘土と互層
No.	箇場	層位	土色	土性	備考
1	SK3003	1層	黒褐色 (1)R2/2	シルト	粘主り 中 底面に柱原
2	SK3003	2層	黒褐色 (1)R3/2	シルト	粘主り 強 柱り方 減少量
3	SK3003	3層	黒褐色 (1)R2/2	シルト	粘主り やや強 柱り方
4	SK3003	4層	黒褐色 (1)R2/2	シルト	粘主り 中 柱化物微量
5	SK3003	5層	黒色 (1)R2/1	粘主り 弱	柱か?
6	SK3003	6層	黒褐色 (1)R2/2	シルト	粘主り やや弱 柱り方
7	SK3003	7層	黒色 (1)R1/7/1	シルト	粘性 強

第4図 東壁土層断面図

## (2) 発見した遺構と遺物

### SK 2999 土坑（第3・5図）

【位置】調査区中央やや東よりで発見している。

【方向・規模】南北が長い楕円形の土坑で、長軸約60cm、短軸約40cm、深さ約40cmある。

【埋土】2層に分層でき、黒褐色の粘質土である。

【遺物】須恵器の破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

### SK 3003 土坑（第3・4図）

【位置】調査区南東端で確認してゐる。

【方向・規模】遺構の半分は、調査区外にあり平面の規模は不明である。深さ約70cmある。

【埋土】 埋土は、黒色～黒褐色土で粘性がある

【遺物】なし

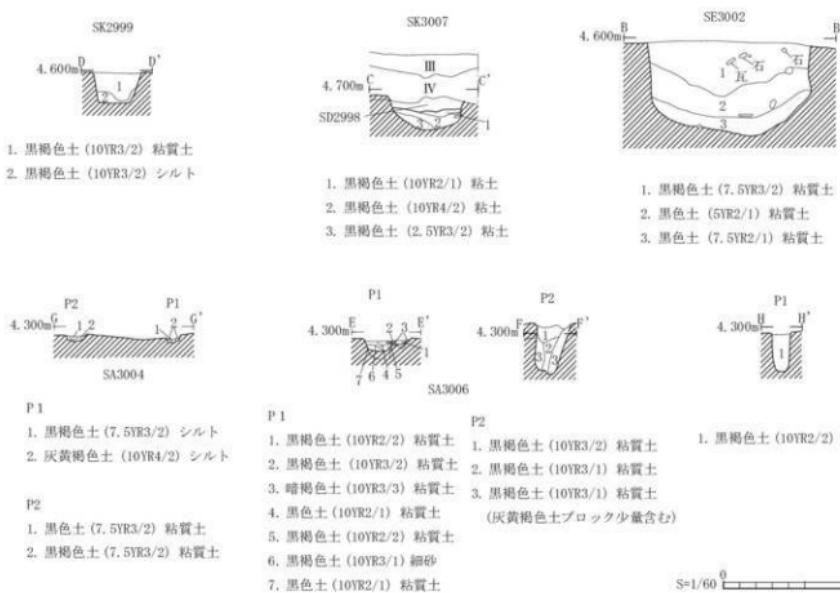
SK 3007 土坑（第3・5図）

【位置】調査区中央部西侧で発見している。西侧半分は調査区外にある。

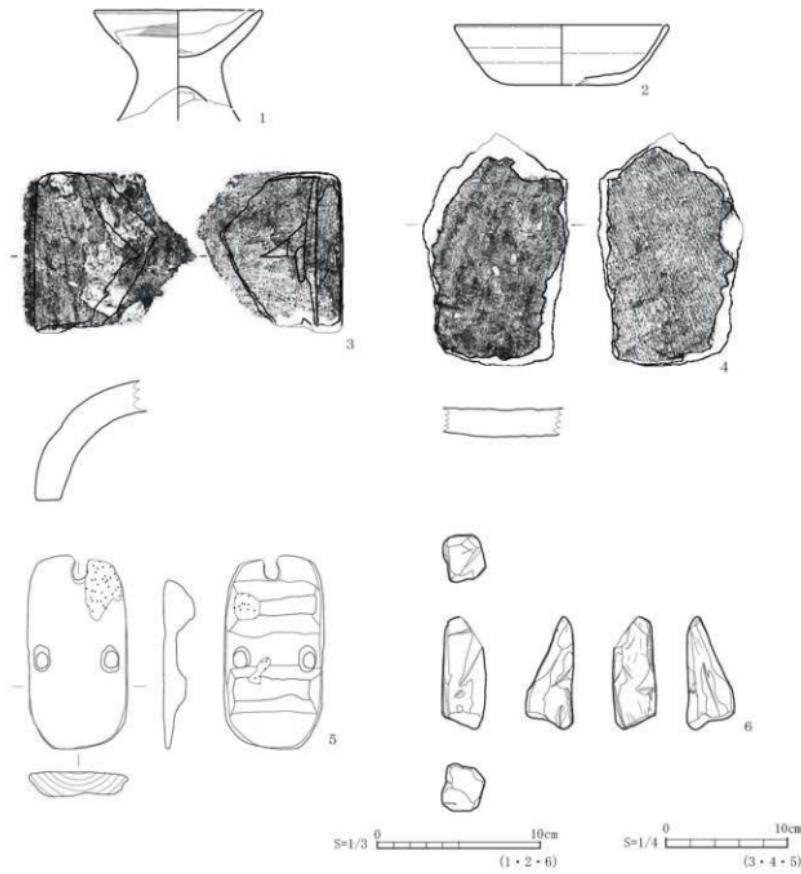
【方向・位置】検出状況から、隅丸方形の可能性がある。深さは遺構確認画から約40cmある。

【埋土】粘性の強い黒色土である。

### 【遺物】なし



第5図 遺構断面図



番号	種類	遺構	層位	特 徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
				外面	内面					
1	土師器 高环	SD3001	4層	口縁部：ヨコナデ 体部：？	口縁部：？	10.2 2/24	-	-	R1	
2	須恵器 环	確認面		口縁部～体部：ロクロナデ 底部：手持ち～ラケヅリ	ロクロナデ	(13.0) 5/24	(7.2) 13/24	3.7	R2	II類
3	瓦 丸瓦	SB3002	調査	布目	布目～ラケヅリ	-	-	-	R4	
4	瓦 平瓦	確認面	調査	布目	布目	-	-	-	R5	
番号	種類	遺構	層位	特 徴		幅	横	厚さ		備考
5	木製品 下駄	SD3001	3層			(15.8)	11.9	2.3	W1	
6	礫石	SD3001	3層			-	-	-	R3	

第6図 出土遺物

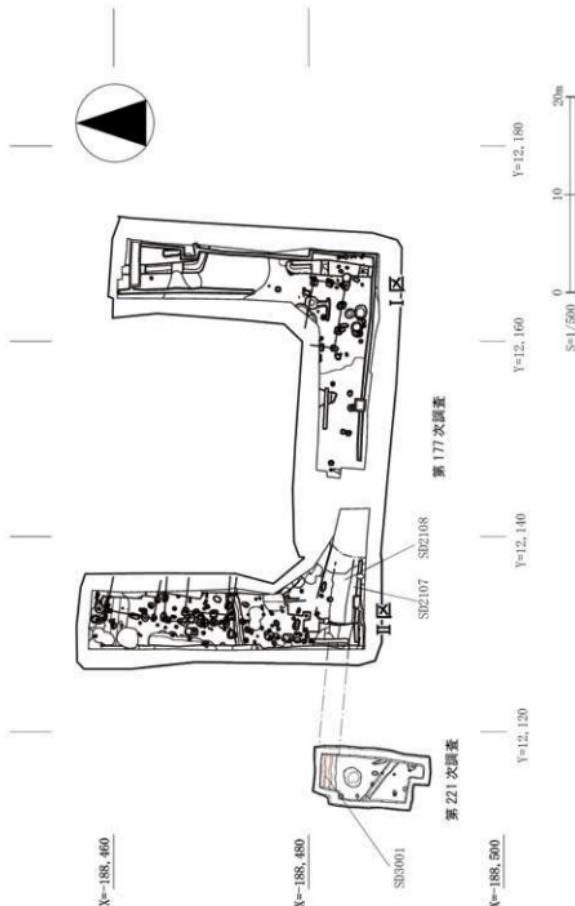
S E 3002 井戸跡（第3・5図）

【位置】調査区中央やや北寄りで発見している。

【方向・規模】東西方向がやや大きく約2m、南北方向約1.7mの楕円形である。

【埋土】黒褐色粘質土で自然堆積である。

【遺物】図示はしていないが、古代の土師器片、須恵器片、近世の肥前系の磁器、すり鉢が出土している。近世の遺構と考えられる。



第7図 第177次調査・第221次調査合成図

#### S D 3001 溝跡（第3・4図）

【位置】調査区中央から南東にかけて発見している。

【方向・規模】幅約65～70cm、深さ約15cmである。北西から南東に延びる溝跡である。

【埋土】黒褐色（10YR2/2）粘質土である。

【遺物】須恵器の破片と近世以降の瓦片が出土しているので、近世以降の溝跡と考えられる。

#### S D 3002 溝跡（第3・4図）

【位置】調査区北側で確認した。

【方向・規模】東西方向の溝跡で、北側が調査区外にあるため、幅は不明である。深さは遺構確認面から約1.3mある。

【埋土】6層に分層できる。この溝跡は2期あり、3～6層までが古い溝の堆積層で（a期）、1・2層が新しい溝の堆積層（b期）で、1・2層は黒色の粘質土で、3～5層は黒色の粘性が強く、6層は暗緑灰色の砂と粘土の互層であった。

【遺物】第6図1は高杯で4層、5は下駄で3層から出土している。図示していないが1層からは、近世の陶器が出土している。3～6層は古墳時代から古代の土師器壺、甕、須恵器甕、布目瓦の破片が出土している。土師器の壺の破片は、ロクロによる成形であることはわかるが、表面の摩滅が激しいため、細かい時期に関しては不明である。b期は1層から近世の遺物が出土しているので、近世の遺構と考えられる。

### 3 まとめ

今回の調査では、古代の遺構と近世の遺構を確認することができた。SD 3001 a期の層から、古墳時代から古代の遺物が出土している。このことから、古代の遺構と考えられるが、土師器の表面が摩滅しており、土器の調整が観察できないため、詳細な時期は不明である。

SD 3001 b期とSE 3002は、近世の遺物が出土しており、近世の遺構と考えられる。他の土坑やピットは、遺構に伴う遺物が出土していないため、時期決定はできない。

なお、SK 3003は、柱跡があることから柱穴であると考えられるが、組むことができる遺構が当調査区内では確認できなかった。

平成28年度に当調査区に隣接地で確認調査（第177次調査）を実施している。その際にII区の南西で2条の溝跡（SD 2107・2108）が確認されている。第6図のように今回確認したSD 3001と前回調査で見つかっている溝跡とつながりそうである。しかし、SD 2107・2108は同時期に機能していたと報告されており、遺構の時期も近代のものと考えられており、今回検出した遺構との関連は、今後の課題である。

### 参考文献

多賀城市教育委員会 2018『新田・山王遺跡ほか-震災復興関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ-』多賀城市文化財調査報告書第137集



1 トレンチ全景（北西から）



2 SK 3003土坑断面（西から）



3 SE 3002井戸跡完掘状況（北から）



4 SD 3001溝跡完掘状況（西から）



5 SD 3001溝跡断面（南西から）



6 SD 3001溝跡遺物出土状況（下駄）



7 SD 3001出土遺物



8 確認面出土遺物

写真図版

## X 山王遺跡第224次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字西町浦における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年2月4日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、既存建物撤去で現地表から50cm掘削した後、281か所に直径約5cmの杭工事を7mの深さまで行うものである。

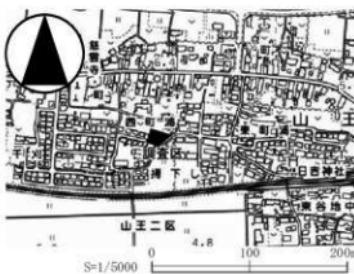
申請地周辺では、東側近接地で平成26年度に第144次調査を実施しており、現表土から約90cmで遺構を発見しているため、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られない判断されたことから、やむを得ず発掘調査による記録保存を行うこととなった。その後、8月24日に地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、9月3日には重機による掘削を開始した。同日午後には調査区中央北寄りで、東西に延びる溝跡SD2767を発見した。9月4日には調査区全体の表土掘削を完了し、スロープの設置、調査区外周の側溝切り回し及び土囊袋の作成等、環境整備を主とした作業を行った。

9月7日には全体の清掃及び遺構の検出作業を開始し、小規模な溝跡のほか複数の方形土坑を複数確認した。調査区の湧水対策を兼ねて、北壁の側溝を深くしつつ、下層遺構の先行確認を行った。その結果、Ⅲ層以下に明確な遺構は確認されず、遺物も出土しないことから、下層遺構は存在しない可能性が高いものとみられた。

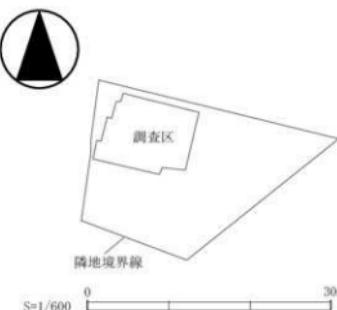
9月9日には遺構検出写真の撮影を行い、同10日には一部の遺構の半裁・断面図の作成に着手した。9月11日には調査区基準点の設置が完了し、断面図と並行して平面図の作成に着手した。

9月14日以降、SD2767の掘削を行ったところ、遺物をほとんど持たない大溝であり、幅約2m深さは約80cmに及ぶことから、中世の区画溝の可能性が想定された。9月18日には年代測定用の土壤採取を行った。途中降雨による作業中断があったものの、概ね9月25日までに遺構掘削及び平面図の作成を完了させ、9月29日から9月30日にかけて重機による埋め戻しを行った。

その後、当初任意で設定した基準点に国家座標を与えるため、調査員2名での測量作業を実施し、現地調査の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

## 2 調査成果

### (1) 基本層序 (第3図)

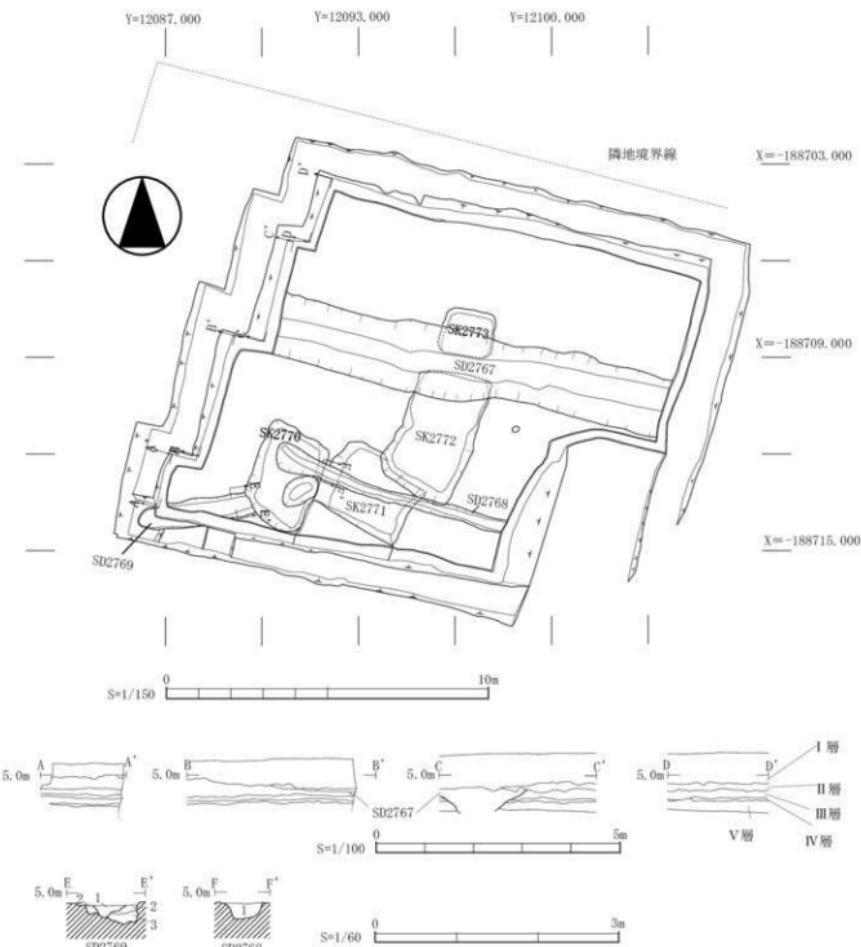
I層：現代の盛土層。

II層：旧耕作土層。

III層：上面が古代～近世の遺構検出面となる。明黄褐色粘質土 (10YR6/6)。

IV層：黒色粘質土 (2.5Y2/1)。

V層：淡黄色シルト (5Y8/4)。



第3図 調査区平面・断面図

## (2) 発見遺構と遺物

### S D2767溝跡（第4図）

【位置】調査区北部で発見した東西方向の溝跡である。

【調査状況・重複】SK2772、SK2773と重複しており、それより新しい。

【形状・規模】幅は検出面で約2.3m、深さは約80cmである。断面は緩やかなステップ状を呈しており、底面はU字形である。

【埋土】植物遺体（種子・枝など）を多量に含む自然堆積層である。堆積層中位で採取した土壤サンプルについて、AMS年代測定を行ったところ、16世紀代を中心とする年代が得られた。

【遺物】施釉陶器皿類（第7図4）、無釉陶器甕（第7図5）が出土している。

### S D2768溝跡（第3図）

【位置】調査区中央やや南よりで発見した東西方向の溝跡である。

【調査状況・重複】SK2770、SK2771、SK2772と重複しており、これより新しい。

【形状・規模】幅は約38cm～60cmであり、深さは約20cmである。

【埋土】均質な黄灰色粘質土（2.5Y4/1）である。

【遺物】染付磁器碗（第7図1）、施釉陶器甕（第7図2）が出土している。

### S D2769溝跡（第3図）

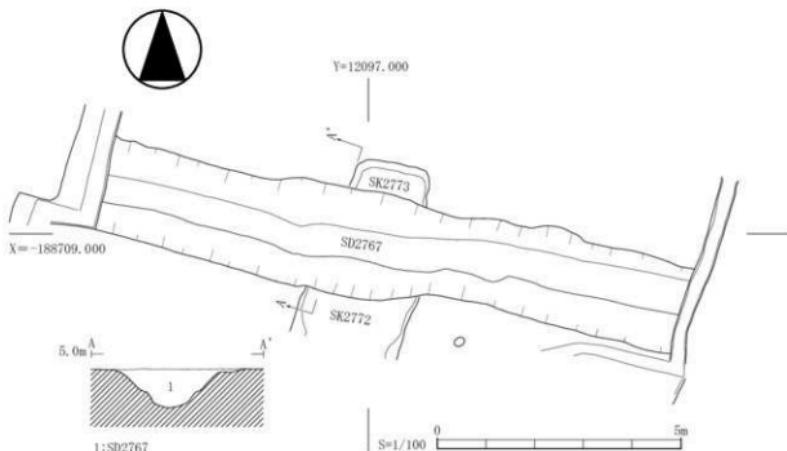
【位置】調査区南西部で発見した溝跡である。

【調査状況・重複】SK2770と重複しており、これより古い。

【形状・規模】幅約70cm、深さ25cmである。

【埋土】1層は黒褐色粘質土（10YR3/1）の自然堆積であり、2層・3層は人為堆積である。

【遺物】須恵系土器坏、土師器B類が出土している。



第4図 S D2767溝跡 平面・断面図

### S K2770土坑（第5図）

【位置】調査区南西部で発見した土坑である。

【調査状況・重複】S D2769、S D2768と重複しており、S D2769より新しく、S D2768より古い。

【形状・規模】長軸3m、短軸2.1m、深さ80cmである。平面は南北に長い長方形であり、壁は急角度で立ち上がる。

【埋土】III層由来の粘質土ブロックを多量に含み、短期間に埋め戻された人為堆積である。

【遺物】灰釉陶器碗皿類が出土している。

### S K2771土坑（第5図）

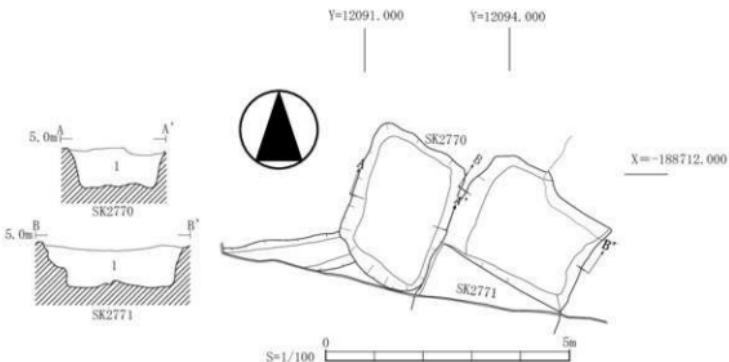
【位置】調査区南側中央部で発見した土坑である。

【調査状況・重複】S K2770、S K2772、S D2768と重複しており、S K2770より新しく、S K2772、S D2768より古い。

【形状・規模】長軸3m以上、短軸約2.8m、深さ約81cmである。平面は南北に長い長方形であり、壁は急角度で立ち上がる。

【埋土】III層由来の粘質土ブロックを多量に含み、短期間に埋め戻された人為堆積である。

【遺物】須恵系土器台付鉢が出土している。



第5図 SK2770・2771土坑 平面・断面図

### S K2772土坑（第6図）

【位置】調査区中央や東よりで発見した土坑である。

【調査状況・重複】S K2771、S D2767、S D2768と重複しており、S K2771より新しく、S D2767、S D2768より古い。

【形状・規模】長軸3.8m以上、短軸約2.4m、深さ約1mである。平面は南北に長い長方形であり、壁は急角度で立ち上がる。

【埋土】III層由来の粘質土ブロックを多量に含み、短期間に埋め戻された人為堆積である。

【遺物】在地系無釉陶器甕破片（第7図6）が出土している。

#### S K2773土坑（第6図）

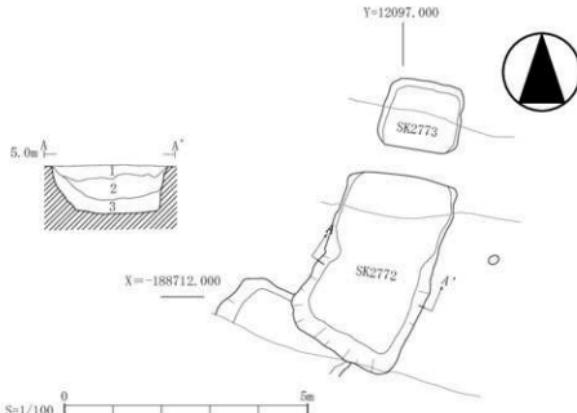
【位置】調査区中央部北半で発見した土坑である。

【調査状況・重複】SD2767と重複しており、これより古い。

【形状・規模】幅約1.7m、深さ約1mである。

【埋土】III層由來の粘質土ブロックを多量に含み、短期間に埋め戻された人為堆積である。

【遺物】土師器壺B V類、土師器甕A類が出土している。



第6図 SK2772・2773土坑 平面・断面図

### 3 まとめ

今回の調査では、古代～近世までの遺構を発見した。

#### (1) 古代の遺構と遺物

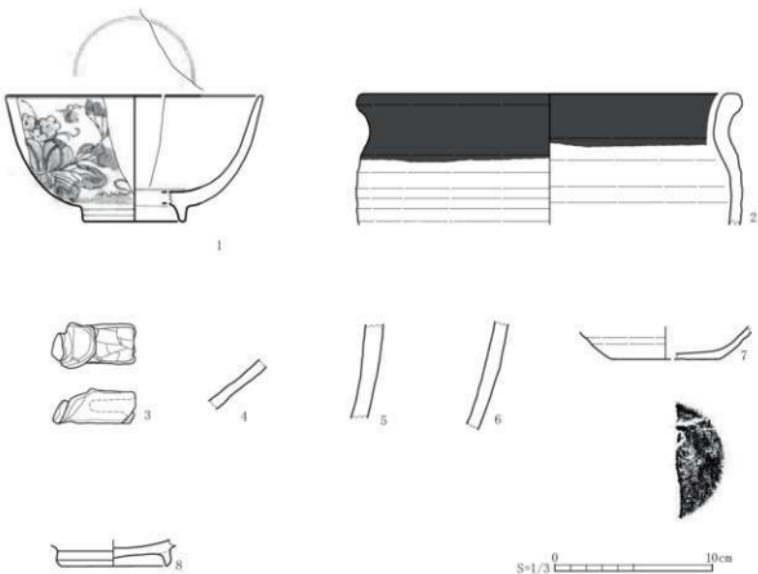
古代の遺構としては、調査区南西部で発見したSD2769が挙げられる。須恵系土器が出土していることから、10世紀以降の溝跡と考えられる。

また、中世の遺構であるSK2770からは、尾張産の灰釉陶器壺皿類が出土している（第7図8）。見込は露胎であり、外面に鈍い稜を持つ三日月高台である。尾野編年IV期中(860～890年)のものと類似しており、9世紀後半頃の年代が与えられる（尾野善裕2008、宮城県多賀城跡調査研究所2020）。

発見した古代の遺構はSD2769のみであるが、中近世の遺構及び表土中から古代の遺物が一定量出土していることから、付近に生活域が存在した可能性が高い。このうち大部分が土師器B類及び須恵系土器であることから、活動の中心は平安時代とみられる。

#### (2) 中世の遺構と遺物

中世の遺構としては、SK2770・SK2771・SK2772・SK2773・SD2767が挙げられる。



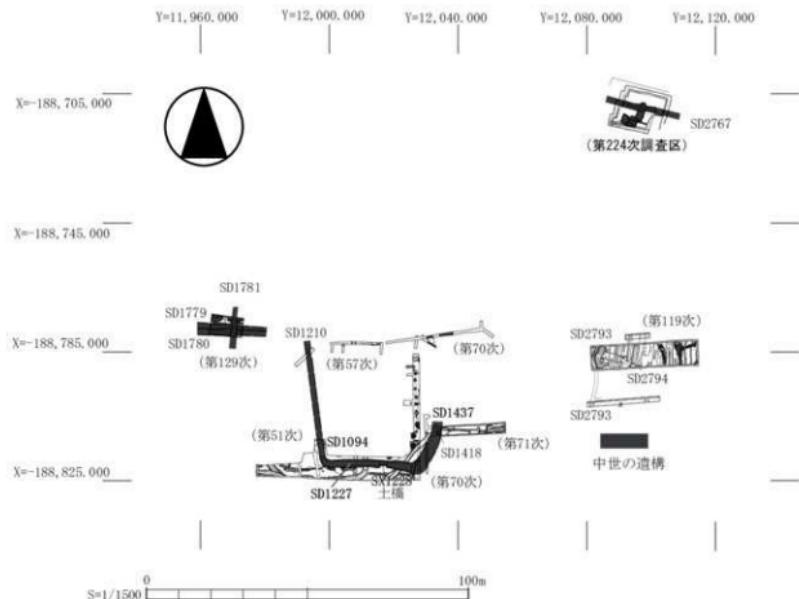
番号	種類	遺構	層位	特徴		口径 底径 残存率	器高	備考	登録番号	(単位: cm)
				外面	内面					
1	染付磁器 碗	SD2768	1層	染付草花文。高台に回線	見込みに回線	16.2 3/24	6.4 3/24	8.0	肥前系	R6
2	陶器 甕	SD2768	1層	ロクロナデ 鉄釉 (下地に赤褐色釉。口縁部 から肩部にかけて黒色釉)	ロクロナデ 鉄釉	(23.8) 3/24	-	8.3	在地産か	R7
3	瓦質土器 造塔柄	-	L I	最大長5.3cm 最大幅2.9 最大厚2.3cm、色調黒褐色					-	R8
4	施釉陶器 皿	SD2767	1層	ロクロナデ 釉色 深オリーブ	釉色 オリーブ黄	-	-	-	瀬戸	R4
5	無釉陶器	SD2767	1層	自然釉	-	-	-	-	常滑	R3
6	無釉陶器	SK2772	1層		ロクロナデ	-	-	-	在地産か	R1
7	須恵系土器 环	SD2769	2層	ロクロナデ 底部:回転条切り無調整	ロクロナデ	-	6.9 11/24	-		R5
8	灰釉陶器 碗皿類	SK2770	1層	ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	6.8 6/24	-	尾張產 (尾賀福平VI期中)	R9

第7図 第224次調査出土遺物

S K2770・S K2771・S K2772は、長辺2m以上深さ1m程度の規模を持つ方形土坑である。軟弱地盤に対して堅穴状の掘削を行い、底面は概ね平坦に仕上げられている。このうちS K2772からは13世紀後半以降の在地系無釉陶器甕の破片が出土しており、その上限年代を示している。いずれも人為的に埋め戻されており、埋土の大部分はⅢ層以下の基本層由来とみられる拳大のシルトブロックによって占められている。

県内では、仙台市富沢遺跡（仙台市教育委員会1987）や大崎市安藤前遺跡で類例が認められる（三本木町教育委員会1995）。富沢遺跡例については、上屋構造が不明瞭であり、堅穴の深さに対して出入り口等の施設がないこと、遺物が僅少であること、平面プランに規格性が認められること、底面が平坦であること等から、住居や廐棄坑ではなく半地下式の貯蔵施設である可能性が指摘されている。今回発見したS K2770・S K2771・S K2772・S K2773についても、上記と共通する特徴が認められるところから、同様の性格が想定される。

また、SD2767溝跡（現地調査時仮番号D1）土壤中より採取した有機物片（果皮）を用いて、AMS年代測定を行ったところ、15世紀末から17世紀初頭頃の年代が得られた（詳細は附章に記載）。SD2767埋土は、樹木枝や種子などの有機物を多量に含む自然堆積層であり、分析用の土壤は堆積中位から採取し



第8図 第224次調査区周辺の遺構配置図

た。有機物片の埋没は溝の廃絶に伴うものと考えられる。

したがって S D 2767について、概ね16世紀頃に埋没した区画溝とみられ、これより古い方形土坑群については、13世紀後半以降16世紀以前の遺構とみられる。

周辺では、南西部の第51・57・70・71次調査で区画溝（S D 1094・S D 1207・1210・S D 1227・S D 1228・S D 1418・S D 1435・S D 1436・S D 1437）及び土橋（S X 1228）を、第129次調査で区画溝（S D 1779・S D 1780・S D 1781）を発見してい

る（多賀城市教育委員会2006a・2010・2014）。また、調査区北西部の第58次調査（多賀城市教育委員会2006b）・北東部の第144次調査（多賀城市教育委員会2017）などでも中世の遺構が散見され、12～15世紀代の遺構・遺物が比較的濃密に分布する地区である。今回の調査成果により、調査区付近に16世紀代まで下る新しい屋敷が存在する可能性が指摘できる（第8図・第9図）。

### （3）近世の遺構と遺物

近世の遺構としてはS D 2768が挙げられる。S D 2768からは18世紀代とみられる肥前系磁器碗・在地系陶器甕が、II層からは瓦質土器熔接柄が出土している。本調査区は近世の塩竈街道沿いの区画からやや離れた位置にあり、近世の遺構・遺物の発見は少量であった。

### 参考文献

- 尾野善裕2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集, pp. 79-92  
三木本町教育委員会1995『安藤前遺跡』三木本町文化財調査報告書第6集  
仙台市教育委員会1992『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)』仙台市文化財調査報告書第163集  
多賀城市史編さん委員会1997『多賀城市史』第1巻 原始・古代・中世  
多賀城市教育委員会2006a「II 山王遺跡第51・57次調査」『山王遺跡第一第51・54・57次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第81集, pp. 4-45  
多賀城市教育委員会2006b『山王遺跡 第58次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第86集  
多賀城市教育委員会2009「XVII 山王遺跡第65次調査」『多賀城市内の遺跡 2』多賀城市文化財調査報告書第95集, pp. 146-156  
多賀城市教育委員会2010「II 第71次調査」『山王遺跡第一第71・77次調査一』多賀城市文化財調査報告書第101集, pp. 2-13  
多賀城市教育委員会2014「V 山王遺跡第129次調査」『多賀城市内の遺跡 2』多賀城市文化財調査報告書第114集, pp. 61-82  
多賀城市教育委員会2017「V 山王遺跡第144次調査」『多賀城市内の遺跡 2』多賀城市文化財調査報告書第119集, pp. 25-38  
千葉孝弥1997「考古学から見た中世の多賀城」『多賀城市史』第1巻 原始・古代・中世, pp. 549-591  
宮城県多賀城跡調査研究所2020『多賀城施釉陶磁器』宮城県多賀城跡調査研究所資料V



第9図 昭和36年航空写真と調査区の位置

## 附章 山王遺跡（第 224 次調査）における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

宮城県多賀城市に所在する山王遺跡（第 224 次調査、SN224）の測定対象試料は、溝跡 D1 から出土した果皮 1 点である（表 1）。果皮は発掘調査現場で採取された土壌の中から採取された。

### 2 化学処理工程

- (1) メス・ビンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 3 測定方法

加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、<sup>14</sup>C の計数、<sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C 濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C) の測定を行なう。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたショウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の <sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 <sup>14</sup>C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C 年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。<sup>14</sup>C 年代と誤差は、下 1 枞を丸めて 10 年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の <sup>14</sup>C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の <sup>14</sup>C 濃度の割合である。pMC が小さい (<sup>14</sup>C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (<sup>14</sup>C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の <sup>14</sup>C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の <sup>14</sup>C 濃度変化などを補正し、実年代に近づいた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が <sup>14</sup>C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 枛を丸めない <sup>14</sup>C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類

によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。曆年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。曆年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 5 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料 No.1 の  $^{14}\text{C}$  年代は  $330 \pm 20$  yrBP、曆年較正年代 ( $1\sigma$ ) は 1506~1635 cal AD の間に 3 つの範囲で示される。試料の炭素含有率は 50% を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

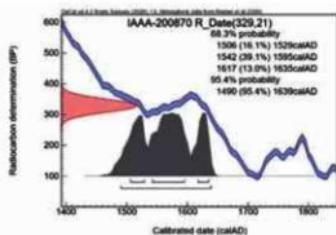


図 1 曆年較正年代グラフ（参考）

表 1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					$\delta^{13}\text{C}$ (%) (AMS)	Libby Age (yrBP)
IAAA-200870	No.1	遺構:D1 層位:e1	果皮	AAA	- $26.07 \pm 0.19$	$330 \pm 20$ $95.98 \pm 0.26$

[IAA 登録番号 : #A331]

表 2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、曆年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-200870	$350 \pm 20$	$95.77 \pm 0.25$	$329 \pm 21$	1506calAD - 1529calAD (16.1%) 1542calAD - 1595calAD (39.1%) 1617calAD - 1635calAD (13.0%)	1490calAD - 1639calAD (95.4%)

[参考値]

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337–360  
 Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725–757  
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355–363



S D 2769断面（西から）



S D 2767断面（東から）



S D 2768断面（西から）



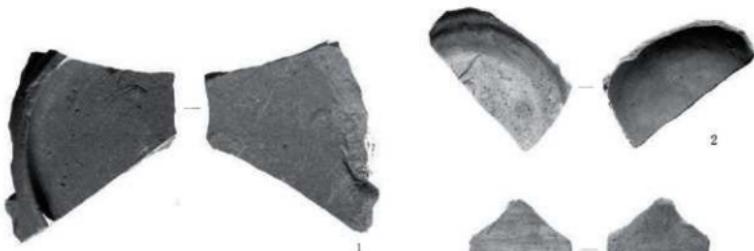
S K 2770断面（南から）



S K 2772断面（南から）



調査風景（南から）



1: 梗皿類 (第6図-8)

2: 坯 (第6図-7)

3: 台付鉢

灰釉陶器

須恵系土器

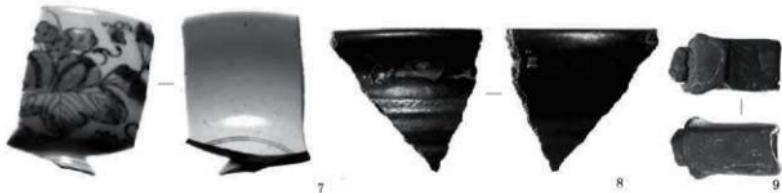


4: 無釉陶器甕 (第6図-5)

5: 無釉陶器甕 (第6図-6)

6: 施釉陶器皿 (第6図-4)

中世陶器



7: 染付磁器甕 (第6図-1)

8: 施釉陶器甕 (第6図-2)

9: 瓦質土器培培柄 (第6図-3)

近世遺物

出土遺物 (Non scale)

## XI 高崎遺跡第125次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、留ヶ谷一丁目地内における戸建て住宅新築工事に伴う本発掘調査である。

令和2年3月4日、地権者より当該地での住宅新築工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅建築の基礎工事の際に現地表から最深42cmの掘削を行う内容であった。申請を受け遺構面までの深さを確認したところ、現地表から15cmの深さで遺構面を確認したことから、遺跡への影響が懸念された。

そのため、工法変更などで遺跡を保存することができないか協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することとなった。その後、地権者から令和2年8月27日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、発掘調査

に着手した。9月11日に重機により表土を掘削したところ、対象範囲の大部分が拳大の礫を多量に含む近年の搅乱によって壊されており、遺構面が残存する範囲は調査区中央付近のごく一部にしか存在しないことを確認した。9月14日に発掘作業員により検出作業を行い、全景写真の撮影と図面作成を行った。その後、16日に重機により調査区埋戻しを行い、17日に調査器材を撤収し、全ての作業を終了した。

### 2 調査成果

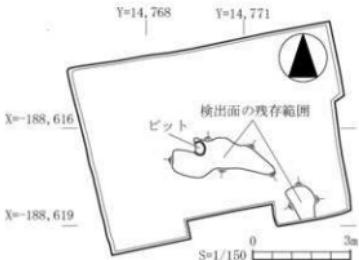
#### (1) 層序

I層：現代の盛土整地層であり、厚さは20～50cmである。

II層：明黄褐色粘質土(10YR6/8)で、時期不明のピットの検出面である。

#### (2) 発見した遺構

ピットを1基発見した。直径は44cmで、埋土は褐色土(10VR4/6)である。遺物は出土していない。



第2図 調査区平面図



第1図 調査区位置図



調査区全景（南東から）

## XII 高崎遺跡第126次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、留ヶ谷一丁目地内における伐根、切土、整地工事に伴う確認調査である。

令和2年8月28日、地権者より当該地での伐根、切土、整地計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、約488m<sup>2</sup>の範囲において、傾斜面の伐根を行った後、最大3mの切土を行って整地し、平坦面を作るもので、当該地の東側で実施した第19次調査では、西側傾斜面で古代の竪穴住居跡を発見している。このことから、遺跡への影響が懸念され確認調査を行うこととなった。

地権者から令和2年11月9日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、令和2年11月20日から発掘調査に着手した。重機による伐根に合わせて、計画地内に3箇所の調査区を設定した。盛土・表土を除去し、Ⅲ層上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構や遺物は確認できなかった。27日に掘削及び平面図・断面図作成、写真撮影などの記録を終了した。

### 2 調査成果

#### (1) 層序

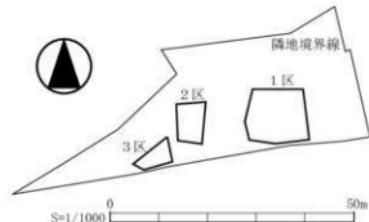
I層：現代の盛土。周辺の造成時に盛られたと推定される。計画地東側で確認した。

II層：暗褐色（10YR3/4）土。大小の礫を含む。厚さは20～30cmある。

III層：にぶい黄橙色（10YR6/4）土である。大小の礫、軽石を含む。地山（ローム層）。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区全景（北から）



調査区全景（西から）

### XIII 志引遺跡第7次調査

#### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、東田中二丁目地内における個人住宅新築に伴う本発掘調査である。令和2年2月14日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。本調査区周辺では、北に約40m離れた昭和58年度第1次調査（多賀城市教委1984）、北東に約30～70m離れた平成28年度第5次調査（同 2017）、平成29年度第6次調査（同 2018）において、古代とされる竪穴造構や竪穴建物跡、近世の溝跡等の遺構が検出されており、当該調査地においても同様の遺構の検出が予測された。計画では、住宅の基礎工事の際に住宅の基礎工事で深さ約1m、その他の部分で約40cmの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念されたため、本発掘調査を実施することになった（第1図）。令和2年5月12日、地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、5月13日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土（I層）除去から取りかかった。調査対象地となる建物建築計画範囲の北側から掘削したところ、現地表から約30cm下で土坑、及び遺物の出土を確認した。15日より作業員を動員し、遺構検出面の精査を行ったところ、SK23土坑、SD24溝跡、SX25・26カマド状遺構、SX27オーバーハングする溝状遺構、SX28粘板岩片集積遺構等を確認した。6月22日に調査区全景の写真撮影とすべての図面作成を終えた。23日に調査区を埋戻すとともに、すべての調査を終了した。

なお、本調査地は国土地理院で公開されている航空写真で確認できる限りで、戦後直後には耕作地として、1960年代には3棟2列の住宅が建てられ、その後少なくとも平成26年までには更地となっている。

#### 2 調査成果

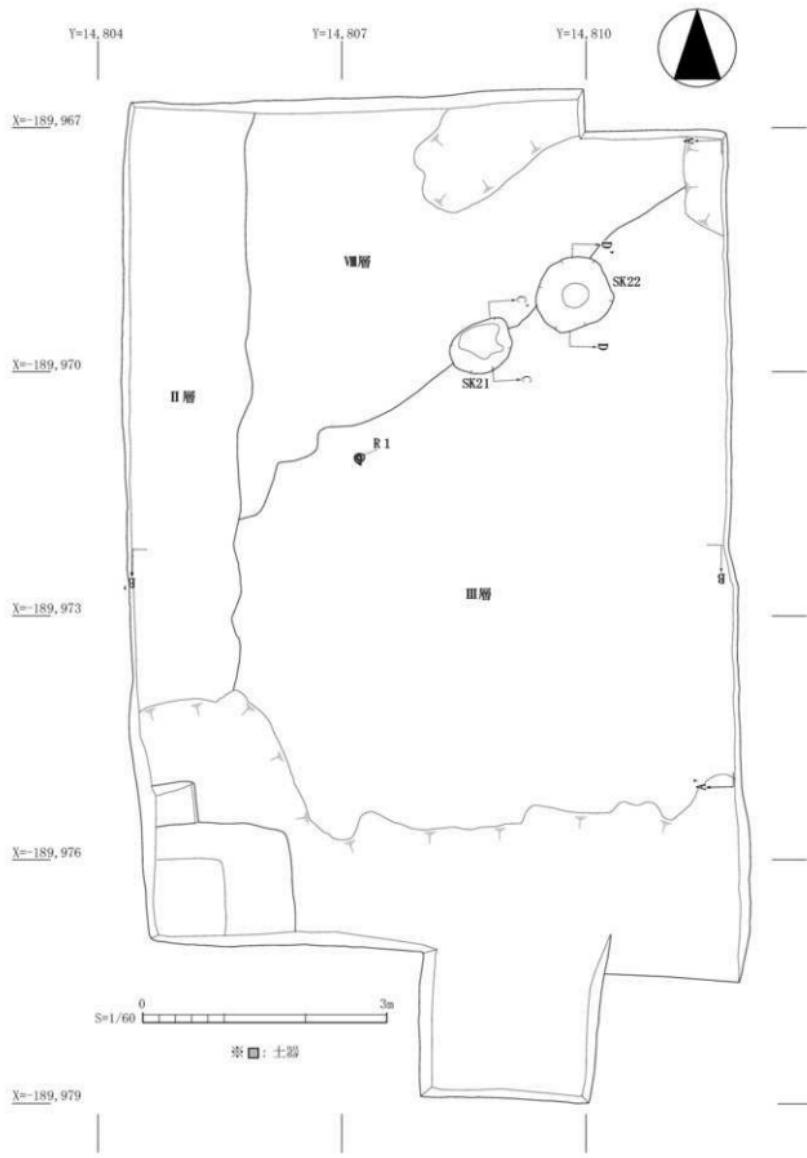
##### （1）層序（第3・4図）

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

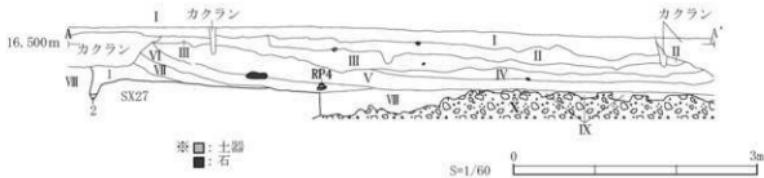
- I層：暗褐色（7.5YR3/3）粗砂質シルト。現表土層。
- II層：暗褐色（7.5YR4/3）細砂質シルト。近現代の整地層。近現代、及び近世の遺物が出土。
- III層：暗褐色（7.5YR3/4）細砂質粘土。近世の遺物が出土。しまりが極めて強い。
- IV層：極暗褐色（7.5YR2/3）粘土質シルト。古墳時代の遺物が出土。
- V層：褐色（7.5YR3/3）細砂質シルト。古墳時代の遺物が出土。
- VI層：黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土。古墳時代の遺物が出土。
- VII層：暗褐色（7.5YR3/4）細砂質粘土。古墳時代の遺物が出土。
- VIII層：褐色（7.5YR4/6）シルト質粘土。ローム層。北半部のI層と接する範囲においてしまりが極めて強い。



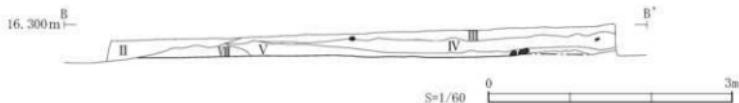
第1図 調査区位置図



第2図 上層検出遺構配置図



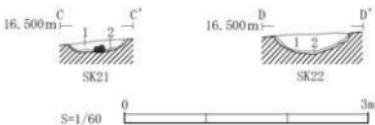
第3図 調査区東壁断面図



第4図 中央ベルト南壁断面図

IX層：褐色（7.5YR4/4）細砂質粘土。V層とX層の漸移層。

X層：赤褐色（5YR4/6）シルト質粘土。淘汰の悪い風化亜円礫の礫層。褐鉄の斑紋が発達。



第5図 上層検出遺構断面図

## （2）発見遺構と遺物

### 上層遺構

上層遺構は、III層上面とVII層上面の境界付近付近において、土坑2基、溝跡1条を発見した。

#### S K21土坑（第2・5図）

【位置】調査区の中央部の北寄り、SK22の南西側に隣接して位置する。

【検出面・重複】III層上面とVII層上面の境界付近で確認された。

【平面形・規模・方向】楕円形を呈する。長軸84cm、短軸62cm、深さ14cmで、方向は東で約43度北の偏する。

【壁・底面】底面は鉢状で、壁は斜めに緩やかに立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層は褐色（7.5YR4/6）細砂質シルトで、焼土と炭化物を多量に含む。2層は暗褐色（7.5YR3/3）細砂質シルト焼土層で、炭化物を多量に含む。

【遺物】底面中央部から礫が出土。

#### S K22土坑（第2・5図）

【位置】調査区の中央部の北寄り、SK21の北東側に隣接して位置する。

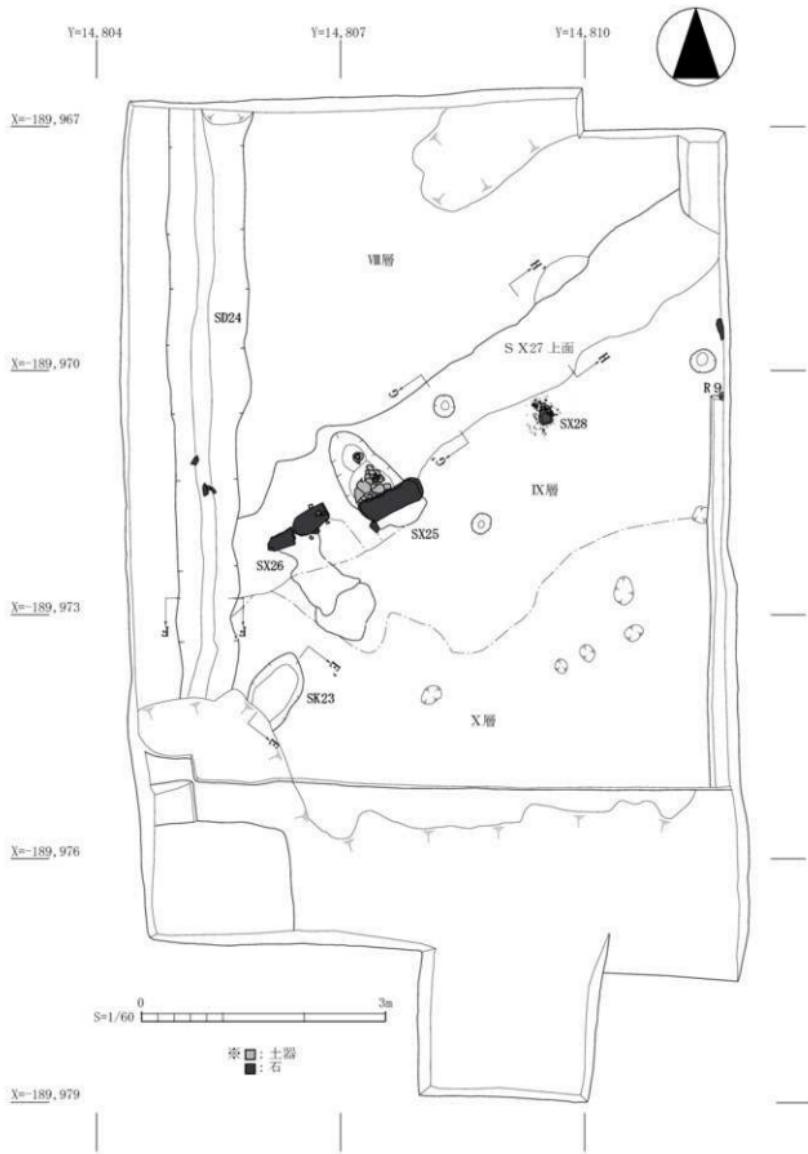
【検出面・重複】III層上面とVII層上面の境界付近で確認された。

【平面形・規模・方向】円形を呈する。長軸96cm、短軸89cm、深さ26cmである。

【壁・底面】底面は鉢状で、壁は斜めに緩やかに立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層は褐色（7.5YR4/6）細砂質シルトで、焼土と炭化物を多量に含む。2層は暗褐色（7.5YR3/3）細砂質シルト焼土層で、炭化物を多量に含む。

【遺物】出土していない。



第6図 下層検出遺構配置図（1）

## 下層遺構

下層遺構は、VII層上面において土坑1基、カマド状遺構2基、オーバーハングする壁面を有する溝状遺構1条、粘板岩片集積遺構1基を発見した。

### S K23土坑（第6～7図）

【位置】調査区の南西側に位置する。

【検出面・重複】X層上面で確認された。南側がカクランにより削平されている。

【平面形・規模・方向】楕円形を呈する。長軸86cm、短軸58cm、深さ12cmである。方向は東側で約60度北に偏する。

【壁・床面】床面はおむね平坦で、壁は斜めに緩く立ち上がる。

【埋土】1層のみ。褐色(7.5YR4/6)細砂質シルトで、暗褐色(7.5YR3/3)細粒砂質粘土で、7.5YR4/6褐色細砂質粘土ブロックをまだらに15%含む。

【遺物】土師器壺1点（第8図1）、及び土師器の破片が多数出土している。土師器はいずれも非クロ成形のものである。

### S D24溝跡（第6～7図）

【位置】調査区の西側に位置する。

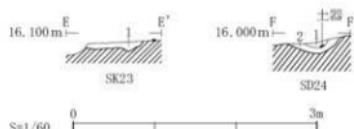
【検出面・重複】VII層上面で確認された。南側がカクランにより削平されている。

【平面形・規模・方向】長軸約7.2m、短軸約1m、深さ20cmである。方向は南北にほぼ直行する。

【壁・床面】床面はU字状で、壁は斜めに緩く立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層が暗褐色(10YR3/4)シルト質粘土で、2層がにぶい黄褐色(10YR4/3)細砂質シルトである。

【遺物】1層より土師器壺1点（第8図2）のほか、土師器の破片が多数出土している。土師器はいずれも非クロ成形のものである。



第7図 SK23・SD24断面図



No.	器種	遺構	層	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録番号
				外面	内面					
1	土師器壺	SK23		赤彩	摩滅		丸底 24/24	(6.1)	8-1	R53
2	土師器壺	SD24		摩滅	摩滅			(7.8)	8-2	R54

第8図 遺構出土遺物

### S X25カマド状遺構(第9~10・12・14図)

【位置】調査区の西部中央に位置する。

S X26の北東に隣接する。

【平面形・規模・方向】平面形はU字形で、規模は長軸約190cm、短軸約100cmである。方向は東で約49度南に偏する。焚口、及び焚口天井部には、最大長83cm、最大幅60cm、最大厚10cmの刃物状工具による切削痕を有する凝灰岩製の大型切石が置かれる。大型切石は、被熱による黒変・赤変化が著しい。その切石の両サイドの直下、すなわち両袖内部に当たる部分の内部にも小型の凝灰岩製切石が組み込まれており、焚口側壁構築の際に切石を使用したとみられる。燃焼部から焚口にかけて、U字形を呈している。なお、袖については、S X27埋土との境界が不明瞭なため、平面での検出は困難であった。

【遺物】煙道中央部から外面が赤色され、

頭部が欠損した土師器壺1点(第9図R1・第12図1)が出土している。さらに、その壺内部に詰まつた土壤の水選別作業によって、径約16mmの球状土製品1点(第12図2)を検出している。燃焼部からは、折り返し口縁の土師器有孔鉢1点(第9図R3・第12図3)、同甕2点の破片(第12図4・5)が出土している。第12図4・5は、類似した胎土と色調から、同一個体の可能性がある。右側奥、S X27の南壁壁面と接する境界付近の10層からは、逆位置に据えられ、重ねられた土師器鉢2点(第9図R4・第12図6)、その右側に正位置に据えられた土師器小型甕1点(第9図R2・第12図7)、土師器壺の左上部に据えられた砂岩製厚手剥片1点(第9図R5・第11図1)が出土している。そのうち、小型甕は、胴部の一部が欠落しており、その部分を打撃によって穿孔している可能性がある(写真図版8-9)。2点の鉢のうち1点は、

Y=14, 804

X=-189, 970

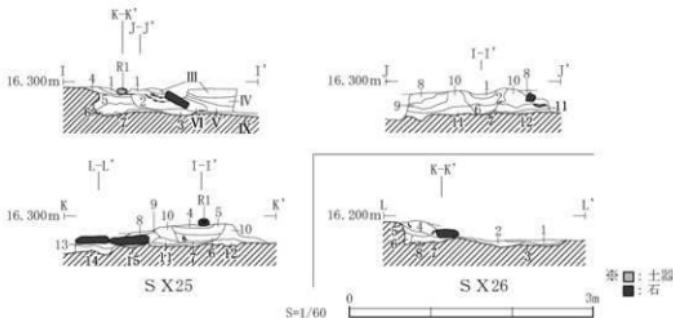
Y=14, 807

X=-189, 973

■ 土器  
■ 石



第9図 カマド状遺構配置図



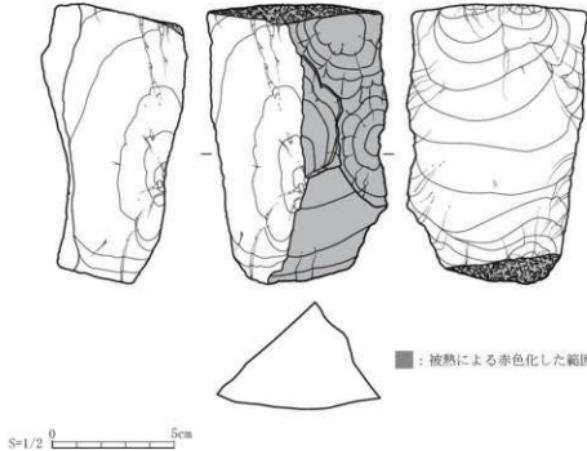
第10図 カマド状遺構断面図

### S X 25 土層注記

No.	遺構	土色	土性	備考
1		7.5YR2/3暗褐色	細砂質シルト	φ1～10mmの風化礫を5%、φ1～5mmの炭化物を3%含む。
2	燃焼部	5YR2/3褐色赤褐色	細砂質シルト	燒土ブロックを10%、φ1～5mmの炭化物を5%含む。
3		7.5YR4/6褐色	細砂質粘土	φ1～5mmの炭化物を3%、土器片をわずかに含む。
4	煙道内部?	5YR2/3褐色赤褐色	細砂質シルト	φ1～5mmの風化礫を5%、φ1～5mmの炭化物を5%含む。
5		7.5YR2/2黒褐色	細砂質シルト	燒土ブロックを5%、φ1～5mmの炭化物を2%含む。
6		7.5YR4/3褐色	細砂質粘土	黒褐色細砂質シルトブロックを5%、φ1mm大の炭化物を1%含む。
7	S X 27埋土	7.5YR6/3にぶい褐色	細砂質粘土	褐色細砂質粘土ブロックを30%、φ1mm大の炭化物を1%含む。
8		7.5YR4/4褐色	細砂質シルト	φ1～5mmの風化礫を3%、φ10mm大の炭化物を1%含む。
9		7.5YR4/3褐色	細砂質シルト	φ1～5mmの風化礫を2%、土器片をわずかに含む。
10	S X 27埋土(抽?)	7.5YR4/4褐色	細砂質シルト	燒土ブロックを5%、φ1～5mmの風化礫を3%、φ1～5mm大の炭化物を5%、土器片をわずかに含む。
11		7.5YR2/3暗褐色	細砂質粘土	燒土ブロックを1%、φ1～5mmの風化礫を1%含む。
12		7.5YR4/6褐色	細砂質粘土	φ1～5mmの炭化物を3%、土器片をわずかに含む。
13	S X 27埋土	7.5YR2/2黒褐色	細砂質シルト	燒土ブロックを10%、φ1～5mmの風化礫を3%、φ1～5mmの炭化物を5%、土器片をわずかに含む。
14		7.5YR4/6褐色	細砂質シルト	燒土ブロックを1%含む。
15		7.5YR3/3暗褐色	細砂質シルト	φ1～5mmの風化礫を1%含む。

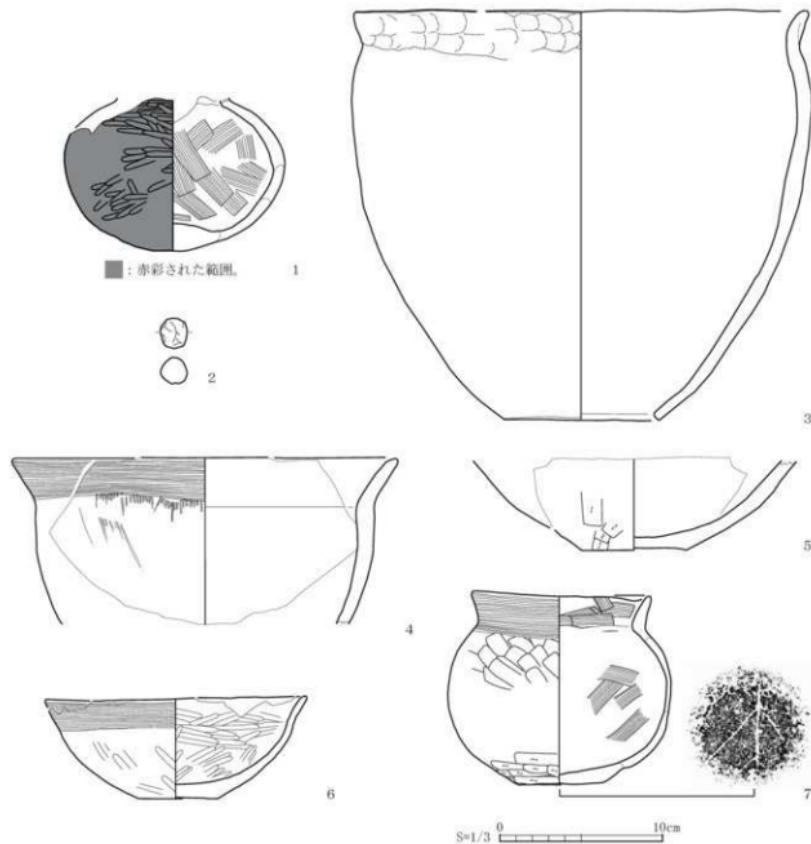
### S X 26 土層注記

No.	遺構	土色	土性	備考
1	黒色土層	7.5YR2/2黒褐色	細砂質シルト	燒土ブロックを10%、φ1～10mmの炭化物を5%含む。
2	焼土層	7.5YR4/3褐色	シルト質粘土	φ1～5mmの炭化物を3%含む。
3		7.5YR4/4褐色	細砂質シルト	φ1～5mmの風化礫を5%含む。
4		7.5YR4/3暗褐色	細砂質シルト	φ1～5mmの風化礫を1%、φ1～5mmの炭化物を3%含む。
5	S X 27埋土	7.5YR2/2黒褐色	細砂質シルト	φ1～5mmの風化礫を1%含む。
6		7.5YR3/2黒褐色	細砂質シルト	下部に暗褐色シルト質粘土ブロックを多量に含む。
7		7.5YR3/4暗褐色	シルト質粘土	φ1～10mmの風化礫を1%含む。
8		7.5YR2/3黒褐色	細砂質シルト	φ1mm大のマンガン粒を多量に含む。



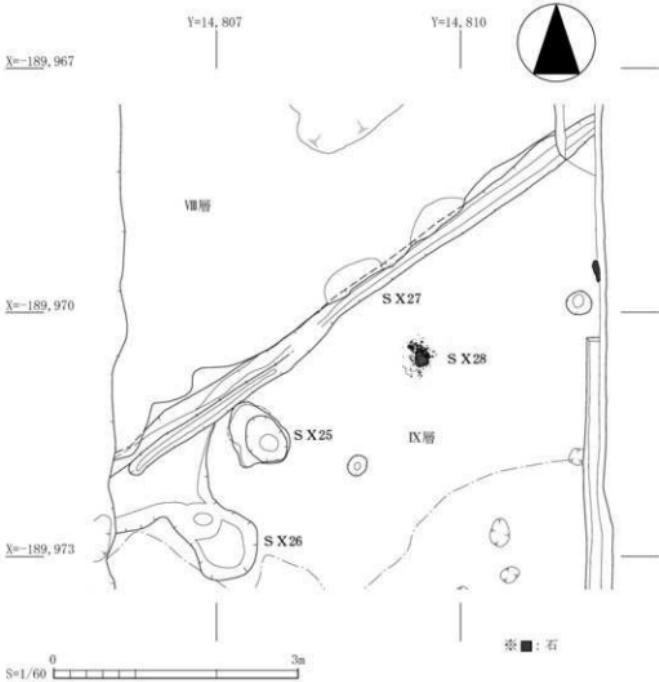
No.	器種	層位	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	写真図版	登録番号	備考
5	剥片	10	砂岩	113.0	73.7	58.3	487.6	9-1	R5	打面・背面右側に被熱痕 ツインバルブ 末端にも1か所剥離開始部あり

第11図 S X 25出土遺物



No.	器種	層	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 壺	1	ミガキ、赤彩	ヘラナデ	—	丸底 24/24	(9.4)	8-3	R1	
2	球状 土製品	—	手ヅクネ		最大長 1.8	最大幅 1.6	最大厚 1.6	8-4	R56	R1内から出土
3	土師器 有孔鉢	2	指オサエ(口)、ケズ リ?(体)	ナデ?(体)、指オサ エ?(口)	23.8 20/24	9.6 13/24	25.2	8-5	R3	折り返し口縁、二次 焼成
4	土師器 壺	2	ヨコナデ(口)、ハケ メ?(体)	摩滅	(23.6) 2/24	—	(10.2)	8-6	R51	R51と同一か
5	土師器 壺	2	ヘラケズリ	摩滅	—	(6.5) 17/24	(5.5)	8-7	R12	R12と同一か
6	土師器 鉢	10	ヨコナデ(口)、ミガ キ(体)	ミガキ	(15.8) 12/24	4.8 24/24	6.2	8-8	R4	
7	土師器 小型壺	10	ヨコナデ(口)、ヘラ ナデ(体)、ヘラケズ リ(底)	ヘラナデ(口・体)	11.0 24/24	5.5 24/24	11.9	8-9	R2	底部木葉痕、底部縁 辺部摩耗(使用痕)、 部一部一部破損(穿 孔?)、二次焼成

第12図 S X 25出土遺物



第13図 下層検出遺構配置図（2）

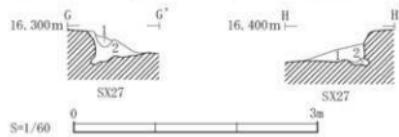
軟化していただけに復元が困難であることから、復元できた1点のみを図化している。土師器はいずれも非ロクロ成形のものである。

#### S X26カマド状遺構（第9～10・14回）

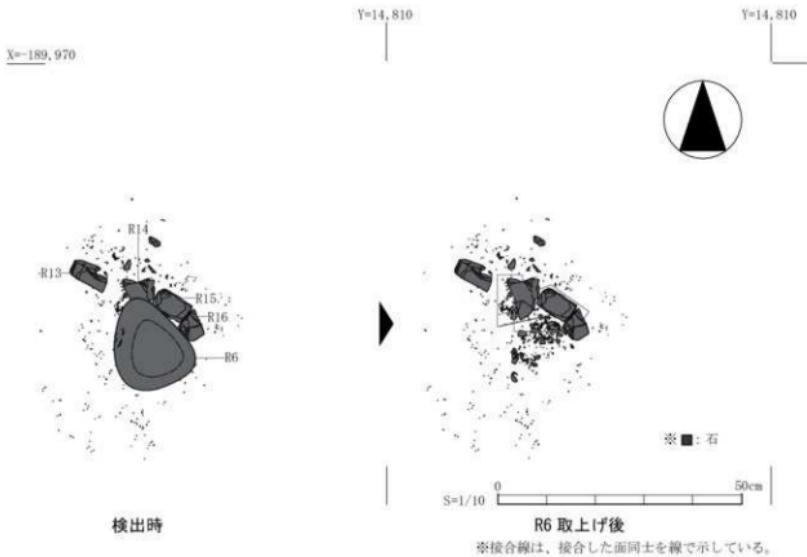
【位置】調査区の西部中央に位置する。S X25の南西に隣接する。

【平面形・規模・方向】平面形は判然としないが、規模はおよそ長軸約205cm、短軸約90cmである。長方向は東で約56度南に偏する。煙出、煙道、煙道口、燃焼部天井・側壁、焚口は確認できない。火床については、焼土の分布範囲から推定される。また、焚口天井部に設置したと思われる、刃物状工具による切削痕を有する軟質凝灰岩製大型切石2点が東西に横並びで置かれている。大型切石は、ともに被熱痕を示す黒変化が著しい。

【遺物】土師器の摩滅した破片が多量に出土しているが、総じて摩滅が著しい。土師器はいずれも非ロクロ成形のものであることは判別できるが、具体的な器種等は不明である。



第14図 S X27断面図



第15図 粘板岩片集積遺構S X 7平面図

#### S X 27オーバーハンプする壁面を有する溝状遺構（第13～14図）

【位置】調査区の西部中央から北東部の東端に位置する。

【検出面・重複】VII層上面で確認された。

【平面形・規模・方向】長さが7.6m、幅約1m、深さ42cmである。方向は東で約36度北に偏する。

【壁・底面】南壁が10cm前後北西側にオーバーハンプする。また底面には、長軸に沿った深さ2～3cm前後のごく浅い溝が1～2条認められる。

【埋土】2層に分けられる。1層は暗褐色(7.5YR3/4)細砂質シルトで、 $\phi$ 1～20mm大の風化礫を5%、 $\phi$ 1～5mm大の炭化物を1%含む。2層は褐色(7.5YR4/4)シルト質粘土で、 $\phi$ 1～5mm大の風化礫を1%含む。

【遺物】埋土から摩滅している土師器の破片が多数出土している。土師器はいずれも非ロクロ成形のものである。

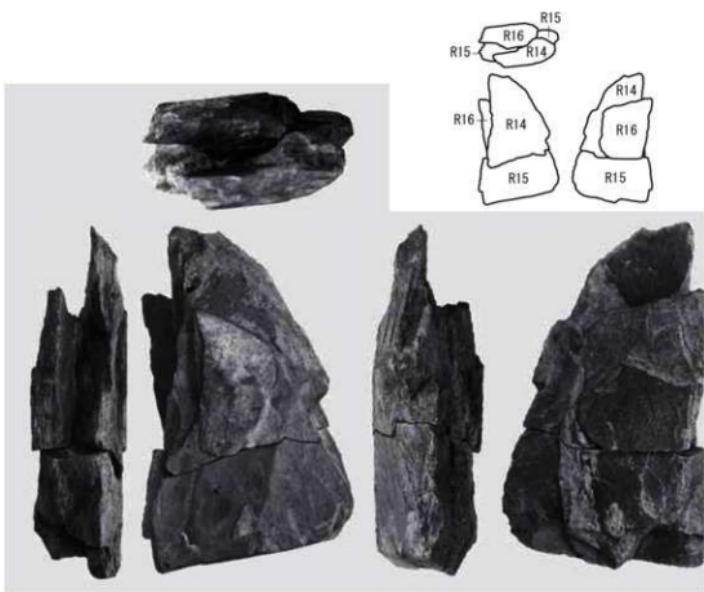
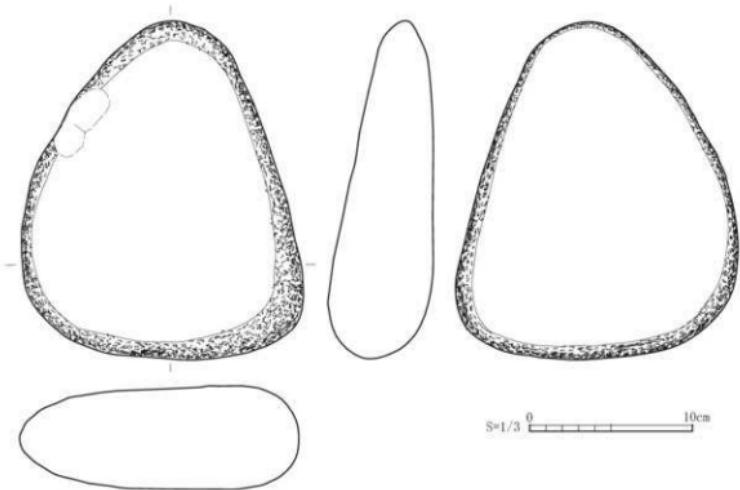
#### S X 28粘板岩片集積遺構（第13・15・16・17・18図）

【位置】調査区の中央部の東よりに位置する。

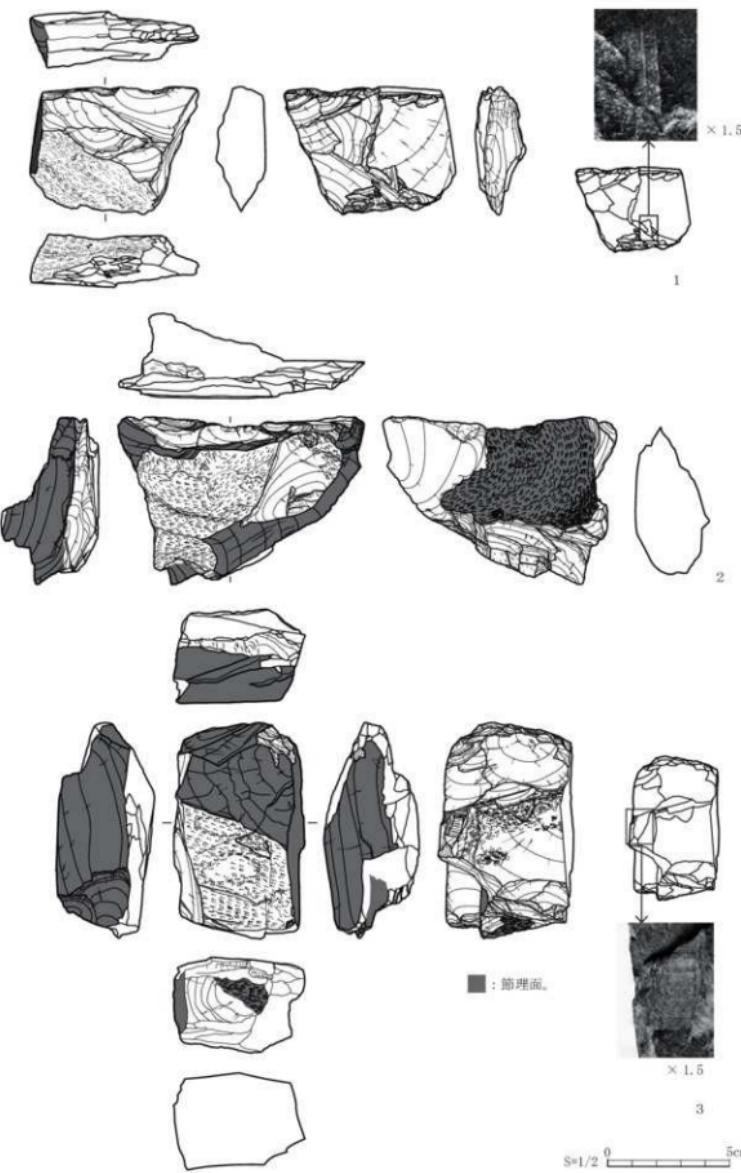
【検出面・重複】IX層上面で確認された。

【平面形・規模・方向】梢円状に分布する。長軸48cm、短軸42cmである。

【状態】上部に斑れい岩製扁平円錐であるR 6（第15図）があり、その直下に粘板岩片が集中的に分布する。粘板岩製石核3点、分割剣1点がおよそ西北西から東南東に並んでおり、その並んだ石核の周囲に1mm以下から4cm大の粘板岩製片・チップが分布する。特に、石核の南側、R 6の直下に集中する。出土状況



第16図 SX28出土石製品（1）

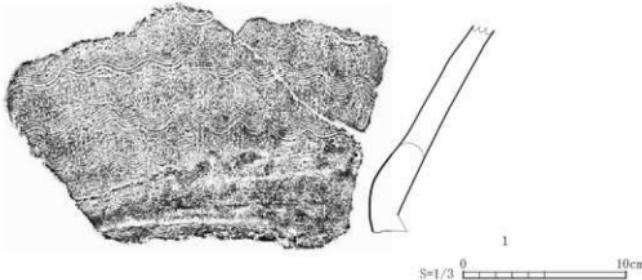


第17図 S X28出土石製品（2）



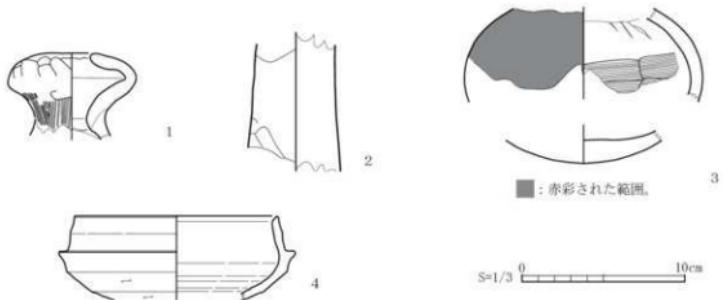
No.	器種	遺構	層位	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	写真図版	登録番号
16-1	砥石?	SX7	VII下	斑れい岩	214.5	170.5	61.5	3439.8	9-2	R6
16-2	接合資料	SX7	VII下	粘板岩	140.2	86.4	39.9	467.6		R14 ~ 16
17-1	石核	SX7	VII下	粘板岩	51.7	64.5	20.7	83.0	9-3	R16
17-2	石核	SX7	VII下	粘板岩	69.9	100.6	38.0	167.8	9-4	R14
17-3	石核	SX7	VII下	粘板岩	88.5	49.3	38.2	220.8	10-1	R15
18-1	分離繩	SX7	VII下	粘板岩	87.3	42.8	34.6	189.3	10-2	R13
18-2	石製模造品木製品	SX7	VII下	粘板岩	61.7	35.5	6.7	14.3		R55

第18図 S X28 (2) 出土石製品



No.	器種	層	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図	登録番号
			外面	内面					
1	須恵器 甌(頸部)	Ⅲ	ロクロナデ、櫛描波状文×4	ロクロナデ	—	—	(12.3)	10-4	R7

第19図 遺構外出土遺物 (1)



No.	器種	層	特徴		口 径 残存率	底 径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 器台	IV	ハケメ(体)、ナデ(口)	ヘラナデ(頸)、ナ デ(口)	2.3 24/24	—	(5.4)	10-5	R9	
2	土師器 高坏	V	ナデ?	—	—	—	(7.2)	10-6	R8	
3	土師器 壺	VI	ナデ?、赤彩	ヘラナデ	—	丸底		10-7	R52	底部二次焼成
4	須恵器 环身	II～V	ロクロナデ、回転ケ ズリ(底)	ロクロナデ	(12.4) 2/24	—	(4.7)	10-8	R10	白色の混和剤

第20図 遺構外出土遺物（2）

から、粘板岩片の分布の上に、被せるようにR 6が設置されている。

【遺物】砥石の可能性がある斑れい岩製扁平碟1点（第16図1）、粘板岩製の石核3点（第16図2）、分割碟1点（第18図1）、石製模造品未製品1点（第18図2）、剥片・チップが38点以上が出土している。

### 3 その他堆積層出土の遺物（第19・20図）

I～II層において近現代の遺物が、3層において近世の瓦・陶磁器が出土した。II層からIX層にかけて多数の非ロクロ成形の土師器や須恵器が出土している。そのうち、III層からは大型の須恵器甕の頸部破片1点（第19図1）、IV層からは土師器器台の上半部1点（第20図1）、V層からは土師器高坏の中実棒状脚部1点（第20図2）、VI層からは赤彩された土師器壺1点（第20図3）が出土している。また、須恵器环身1点（第20図4）がII～V層かけて出土している。

### 4まとめ

#### （1）遺構・遺物の年代

上層で検出したSK21・22は、出土遺物がないため、遺構の所属時期は不明と言わざるを得ない。

下層で検出したSX25からは、一括性の高い土師器を中心とする遺物が出土している。煙道部出土の第12図1は、口縁部が欠損しているものの、外面がミガキ、内面がヘラナデで調整され、さらに外面が赤彩された壺である。体部がやや張り出し、凸レンズ状に肥大した厚さの丸底となる。燃焼部出土の第12図3は、指オサエで調整された折り返し口縁の有孔鉢で、やや湾曲した長胴形の体部で、口径に対して器高が大きい。右側部の奥より出土した第12図7は、体部形状がなで肩で、張りがやや弱い小型甕で、体部中央の一部に打撃による穿孔とみられる欠損部がある。同じく、第12図6は口縁部がくびれて短く外傾し、

内面に稜をもつ平底の鉢である。これらの形態的な特徴からは、市内山王遺跡や市川橋遺跡出土の古墳時代中期中葉の土器群（B群土器〔引田式〕：宮城県教委2018）に相当するものと考えられる。したがって、S X25は古墳時代中期中葉の5世紀中葉の所産と考えられる。5世紀中葉がカマドの導入期として考えられている（宮城県教委 同上）ことからも、所属時期の妥当性が言えよう。

また、S X23は、第12図1と同様の凸レンズ状に肥大した丸底底部の赤彩された土師器壺である第8図2が出土していることから、S X25と同時期の遺構として考えられる。石製模造品の製作残滓の集積遺構であるS X28についても、S X28がS X25の構築面と同一面であることから、両者は大きな時期差はないものと考えられる。石製模造品の出現期が中期であることからしても、齟齬はないと考えられる。

S D24出土の土師器壺である第8図2については、破片資料のため判然としないものの、おおむね古墳時代の所産と考えられる。S D24は、S X27を切って構築されており、それよりも新しい遺構と言えよう。

遺構外出土土器では、口縁が大きく内傾し貫通孔を有する器台である第20図1、そして中実の高壠脚部である第20図2が形態的特徴から古墳時代前期のものとして捉えられる。須恵器坏身である第20図4は、形態的な特徴から古墳時代後期初頭である6世紀前半から後期後半の7世紀中葉の幅の広い年代観が考えられる。なお、本遺跡第5次調査において本資料と類似した「平城京分類坏H」とみられる須恵器坏の破片が出土し、第6次調査の報告で「平城京分類坏H」として「7世紀中頃」のものであると断定的に位置付けている。さらに、第6次調査で検出された竪穴建物に伴う土師器甕が頭部の「段が弱く、新しい要素」として、第5次調査の「平城京分類坏H」を加味したうえで7世紀代の遺構・遺物として位置付けている。しかし、「平城京分類坏H」とされる資料が小破片であること、7世紀より古い甕にも「段が弱い」ものがあることから、第5・6次調査発見の遺構・遺物に対して、狭い年代観を当てることは無理があると言えよう。

### （2）オーバーハングする溝状遺構について

S X27は、当初カマド状遺構があること、本遺跡第6次調査のS I 15、及び周辺遺跡においてオーバーハングする周溝を有する竪穴建物跡の例があるため、竪穴建物跡の周溝の可能性が想定された。しかし、柱穴や張り床、竪穴建物跡のコーナー部分が認められないこと、VII層上面が南に約4度程度緩やかに傾斜していることから、竪穴建物跡であると決定付ける証拠が認められず、竪穴建物跡の周溝とは断定することができなかった。もちろん、S X25・26の存在や、VII層より大きく削平された可能性もあることから、竪穴建物跡の可能性も排除できない。いずれにしても、調査範囲が狭いため、今後隣接地での調査成果を待ちたい。

### （3）カマド状遺構について

2基のカマド状遺構は、調査区北側を東西に横断するS X27に接続するように検出された。そのため、2基のカマド状遺構は、S X27よりも新しいことが言える。S X25・26は重複していないことから、両者の前後関係は不明である。

ともに、凝灰岩製の刃物状工具によって整形された切石が、焚口天井や側壁に構築材として用いられている。市内の山王遺跡や西沢遺跡などの周辺遺跡において、カマドの構築材として凝灰岩製切石を用いた例が認められるが、その年代は6世紀後半から9世紀前葉である（宮城県教委2018）。県内において古い事例は、蔵王町都遺跡S I 2 竪穴住居跡の古墳時代中期の5世紀中葉（蔵王町教委2005）、同町窪田遺跡S I 101竪穴住居跡（蔵王町教委2011）と東松島市亀岡遺跡のS I 2・3（多賀研2004）の5世紀後葉、などが挙げられ、カマド導入期から切石をカマドの構築材に用いられていることが分かっている。本遺構が竪穴建物に付属するカマドであるかは判然としないが、構築材として切石が用いられた比較的古い例

となろう。

なお、右奥のS X27と接する付近には、土師器鉢2点が逆位に重ねられた状態で、さらにその右隣に土師器小型甕が正位の状態で出土している。また、S X25の煙道中央からは、球状土製品第12図2を内蔵し、赤彩された壺第12図1が正位の状態で出土しており、当該構造の構築と廃棄の際に、何らかの意図をもって設置された可能性がある。

#### (4) 粘板岩集積遺構について

S X28では、粘板岩製の石核3点（第15図R14～16）や分割礫1点（第15図R13）、石製模造品未製品1点（第18図2）、剥片・チップ38点以上と、斑れい岩製扁平円錐（第15図R6）が粘板岩製剥片・チップの上に被された状態で検出された。石核3点は接合し、接合しない分割礫R13とその他の石製模造品未製品や剥片チップについても、石質から同一母岩の可能性がある（脱稿後、R15に剥片が1点、R13に付随剥片が新たに接合）。これらの粘板岩片の総重量が約1kg程度で、およそ拳大の原材から剥離したもののが、約50cmの範囲に密集させたものと言える。接合線や出土状態は、接合面が隣り合っていないことから、土圧等でその場で割れたのではなく、別の場所で割られたものがまとめられたことを示している。

接合資料からは、内部に発達するテクトニクス割れに起因する節理面と、粘板岩質に挟まれた粒子の粗い砂岩質部分が発達する原材を素材とし、節理面や砂岩質部分で接合していることがわかる。そのため、意図的に分割したというよりも、事故的に分割された可能性が高い。接合する3点の石核は、周囲に打撃による多数の剥離面が認められ、さらにこの剥離面に重複するかたちで幅10mm程度の刃先が平タガネ状の工具による切削痕が数ヶ所認められる。これらの剥離や切削痕は、方向や連続性に強い規則性がないため、何らかの形を成すために施されたというよりも、あくまでも石核から小型の石片を生産することを意図していたと考えられる。したがって、石製模造品の素材剥片を剥離する際には平タガネ状工具を用いた間接打撃の可能性が考えられる。S X28では具体的にどのような石製模造品が製作されたかは不明であるが、剥離された素材剥片は第18図2から周縁を一定程度打ち欠いて成形したと考えられる。また、同品は何らかの理由で、製作が止められ、廃棄されたものと言える。斑れい岩製扁平円錐は、線条痕や敲打痕が認められないものの、表裏面が平滑であることから、砥石として使用された可能性がある。

なお、当該調査区より北に約30m離れた地点では、昭和58年に第1次調査が行われ、縄文時代草創期から3万年を超えるとされた「前・中期旧石器」が「出土」した（多賀城市教委1984）。しかし、平成12年11月の前・中期旧石器のねつ造が発覚。第1次調査で「出土」した資料についても検証した結果、故意に縄文時代等の異なる時代の石器資料を土中に埋めたねつ造であることが判明した（多賀城市教委2003）。本調査、及び第5・6次調査も含めて、古墳時代を遡る遺物、特に旧石器・縄文時代の石器資料がまったく出土しなかつたことからも、第1次調査資料がねつ造であった可能性が高いことを裏付けていよう。

#### 引用・参考文献

- 青山博樹2010『古墳時代前期の土器編年一仙台平野とその周辺一』北杜一社秀人先生還暦記念論集一 pp.17-36  
藏王町教育委員会2005『都遺跡ほか』藏王町文化財調査報告書第3集  
藏王町教育委員会2011『座田遺跡』藏王町文化財調査報告書第11集  
多賀城跡調査研究所2004『亀岡遺跡II』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第29冊  
多賀城市教育委員会1984『志引遺跡一志引遺跡発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第6集  
多賀城市教育委員会2017『多賀城市内の遺跡2－平成28年度ほか発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第132集  
多賀城市教育委員会2018『多賀城市内の遺跡2－平成28年度ほか発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第138集  
宮城県教育委員会2018『山王遺跡VII-三陸沿岸同建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書一』宮城県文化財調査報告書第246集



遺構完掘状況（南から）



調査区西壁堆積状況（南西から）

写真図版 1



S K21堆積状況（東から）



S K22堆積状況（東から）



S K21・22完掘状況（南から）

写真図版 2



S K23堆積状況（南東から）



S K23完掘状況（南東から）



S D24完掘状況（南から）

写真図版3



S D24堆積状況（南から）



S X25・26検出状況  
(南東から)



S X25堆積状況  
(南西から)

写真図版 4



S X25切石直下の遺物  
出土状況（南東から）



S X25燃焼部完掘状況  
(南東から)



S X25右侧奥遺物出土状況  
(南東から)

写真図版 5



S X26堆积状况（西から）



S X27堆积状况（南西から）



S X27完掘状况（南東から）

写真图版 6



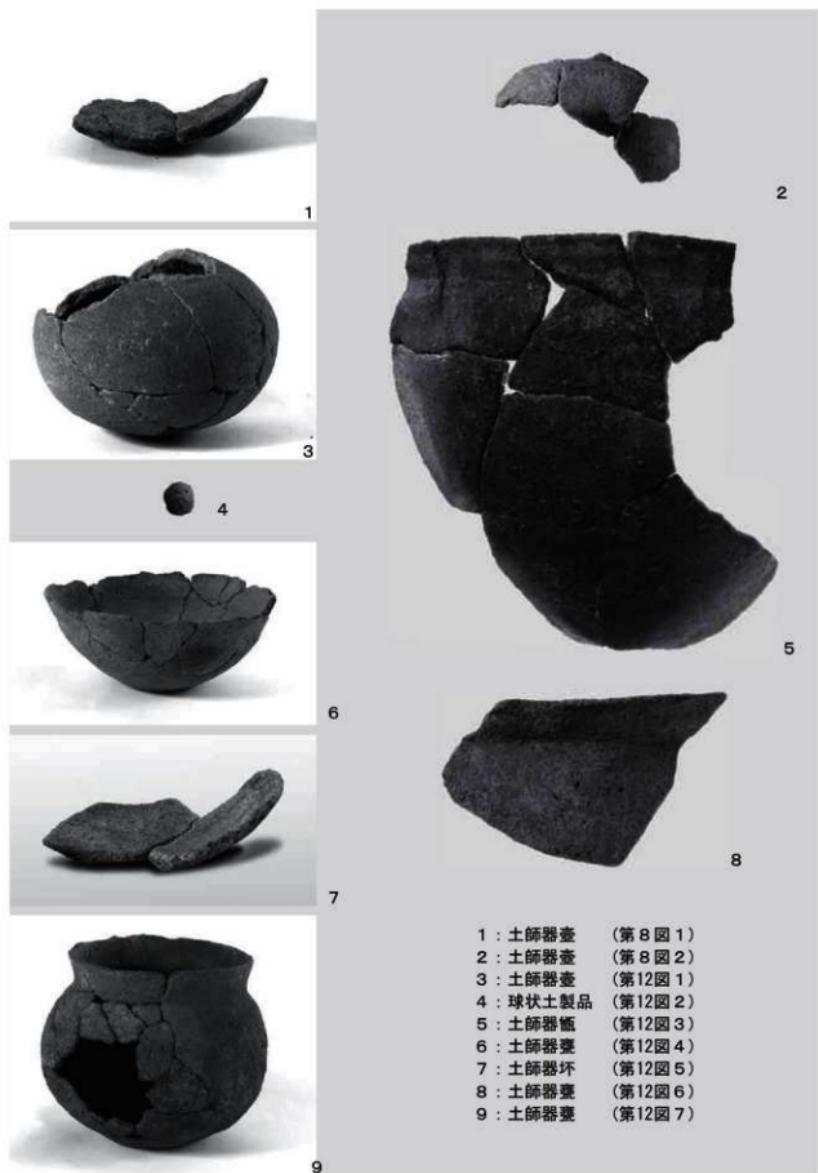
S X28粘板岩片集積遺構  
検出状況（南から）



S X28粘板岩片集積遺構  
検出状況（北東から）



S X28粘板岩片集積遺構  
R 6取上げ後遺物出土状況  
(南から)



写真図版 8

- 1 : 土師器壺 (第8図1)
- 2 : 土師器壺 (第8図2)
- 3 : 土師器壺 (第12図1)
- 4 : 球状土製品 (第12図2)
- 5 : 土師器壺 (第12図3)
- 6 : 土師器壺 (第12図4)
- 7 : 土師器壺 (第12図5)
- 8 : 土師器壺 (第12図6)
- 9 : 土師器壺 (第12図7)



1 : 砂岩製剥片 (第13図 1)

2 : 斑れい岩製砥石 (第17図 1)

3 : 粘板岩製石核 (第17図 1)

4 : 粘板岩製石核 (第17図 2)



2



3



4

写真図版 9



1



2



3



4



5



6



7



8

- 1 : 粘板岩製石核 (第17図3)  
2 : 粘板岩製分割櫛 (第18図1)  
3 : 石製模造品未製品 (第18図2)  
4 : 須恵器大型甕 (第19図1)  
5 : 土師器器台 (第20図1)  
6 : 土師器高坏 (第20図2)  
7 : 土師器壺 (第20図3)  
8 : 須恵器坏 (第20図4)

写真図版 10

## XIV 大代遺跡第6次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、大代六丁目における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年8月、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。通路部分の舗装が軽微であり、掘削を伴わないものの、工事対象面積が広域であることから、確認調査を行うこととなった。

今回の調査は、遺跡範囲の北端にあたる。調査は敷地範囲内に幅約2m、長さ約5~6m、深さ約2~2.5mのトレンチを5本設定して実施した。

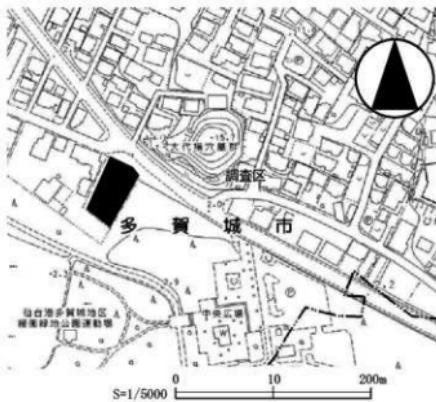
各トレンチは、深さ1.5~2.5mまで現代の盛土であり、その下は厚さ20~40cmの旧耕作土層、その下は厚さ約30cmの植物遺体が多く含まれる泥炭質の層、最下層は砂層であり、遺構・遺物は確認されなかった。



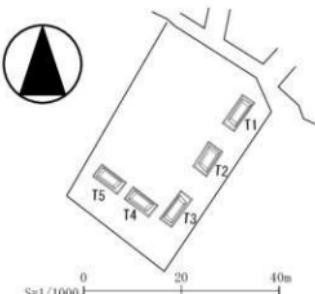
T 1 堀削状況



T 3 堀削状況



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



T 5 堀削状況

# 報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき 2
書名	多賀城市内の遺跡 2
副書名	令和2年度ほか発掘調査報告書 山王遺跡 新田遺跡 高崎遺跡 志引遺跡 大代遺跡
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第148集
編著者名	大木丈夫 小原駿平 大場正善 斎藤健 佐藤純平 赤澤靖章 小原一成
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134
発行年月日	西暦2021年3月29日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 (第141次)	宮城県多賀城市新田字後93番3	042099	18012	38度17分58秒	140度57分34秒	20200302 ~ 20200305	30m <sup>2</sup>	個人住宅新築
新田遺跡 (第144次)	宮城県多賀城市新田字西39番3	042099	18012	38度17分39秒	140度57分47秒	20200721	70m <sup>2</sup>	建売住宅新築
新田遺跡 (第145次)	宮城県多賀城市新田字北144番4	042099	18012	38度17分44秒	140度57分42秒	20200907 ~ 20200929	62m <sup>2</sup>	個人住宅新築
新田遺跡 (第146次)	宮城県多賀城市新田字北145番3、 145番5	042099	18012	38度17分44秒	140度57分42秒	20200907 ~ 20200929	56m <sup>2</sup>	個人住宅新築
新田遺跡 (第147次)	宮城県多賀城市新田字北145番4	042099	18012	38度17分44秒	140度57分41秒	20200907 ~ 20200929	66m <sup>2</sup>	個人住宅新築
新田遺跡 (第149次)	宮城県多賀城市新田字後25番1	042099	18012	38度18分0秒	140度57分28秒	20201102 ~ 20201127	56m <sup>2</sup>	個人住宅新築
新田遺跡 (第150次)	宮城県多賀城市南宮字一里塚101番 地3、南宮字庚申251番地3	042099	18012	38度18分3秒	140度58分1秒	20201104 ~ 20201118	150m <sup>2</sup>	宅地造成
山王遺跡 (第219次)	宮城県多賀城市山王山二区53番3	042099	18013	38度17分33秒	140度58分28秒	20200302	4 m <sup>2</sup>	店舗新築
山王遺跡 (第220次)	宮城県多賀城市南宮字伊勢225他	042099	18013	38度17分58秒	140度57分44秒	20200305 ~ 20200325	380m <sup>2</sup>	宅地造成
山王遺跡 (第221次)	宮城県多賀城市南宮字町81番13	042099	18018	38度18分7秒	140度58分20秒	20200408 ~ 20200512	62m <sup>2</sup>	個人住宅新築
山王遺跡 (第224次)	宮城県多賀城市山王字西町浦83番1	042099	18018	38度18分0秒	140度58分17秒	20200903 ~ 20201011	180m <sup>2</sup>	個人住宅新築
高崎遺跡 (第125次)	宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目31番5	042099	18018	38度18分10秒	141度0分9秒	20190305	45m <sup>2</sup>	建売住宅新築
高崎遺跡 (第126次)	宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目231番 34、240番5	042099	18018	38度18分9秒	141度0分11秒	20190306	187m <sup>2</sup>	切土、整地工事
志引遺跡 (第7次)	宮城県多賀城市東田中二丁目351番2	042099	18020	38度17分29秒	140度59分57秒	20200520 ~ 20200624	90m <sup>2</sup>	個人住宅新築
大代遺跡 (第6次)	宮城県多賀城市大代6丁目28番1	042099	18039	38度17分27秒	141度2分24秒	20201027	50m <sup>2</sup>	宅地造成

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田遺跡 (第141次)	集落・屋敷・水田				
新田遺跡 (第144次)	集落・屋敷・水田				
新田遺跡 (第145次)	集落・屋敷・水田				
新田遺跡 (第146次)	集落・屋敷・水田				
新田遺跡 (第132次)	集落・屋敷・水田				
新田遺跡 (第147次)	集落・屋敷・水田				
新田遺跡 (第149次)	集落・屋敷・水田	古墳・古代	竪穴建物跡・小溝群	土師器	
新田遺跡 (第150次)	集落・屋敷・水田	古代	溝跡	土師器・須恵器	
山王遺跡 (第219次)	集落・都市				
山王遺跡 (第220次)	集落・都市	古代	溝跡・小溝		
山王遺跡 (第221次)	集落・都市	古代・近世	溝跡・井戸跡	土師器・須恵器・陶磁器	
山王遺跡 (第224次)	集落・都市	古代・中世	竪穴状遺構・溝跡	土師器・中世陶器	
高崎遺跡 (第125次)	集落・城館		ピット		
高崎遺跡 (第126次)	集落・城館				
志引遺跡 (第7次)	散布地・城館	古墳	カマド状遺構	土師器・石製模造品残滓	
大代遺跡 (第6次)	散布地				
要 約	新田遺跡第141次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。				
	新田遺跡第144次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。				
	新田遺跡第145次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。				
	新田遺跡第146次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。				
	新田遺跡第147次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。				
	新田遺跡第149次調査では、古墳時代の竪穴建物跡と古代の小溝群を発見した。				
	新田遺跡第150次調査では、古代の溝跡を発見した。				
	山王遺跡第219次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。				
	山王遺跡第220次調査では、古代の溝跡と小溝群を発見した。				
	山王遺跡第221次調査では、古代の溝跡や近世の井戸跡などを発見した。				
	山王遺跡第224次調査では、古代の溝跡や中世の竪穴状遺構や溝跡などを発見した。				
	高崎遺跡第125次調査では、時期不明のピットを発見した。				
	高崎遺跡第126次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。				
	志引遺跡第7次調査では、古墳時代のカマド状遺構と石製模造品製作跡を発見した。				
大代遺跡第6次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。					

---

---

多賀城市文化財調査報告書第148集

## 多賀城市内の遺跡 2

— 令和2年度ほか発掘調査報告書 —

令和3年3月29日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
宮城県多賀城市中央二丁目27番1号  
電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会  
宮城県多賀城市中央二丁目1番1号  
電話 (022) 368-1141

印刷 株式会社 工陽社  
宮城県塩竈市尾島町8番5号  
電話 (022) 365-1151

---

